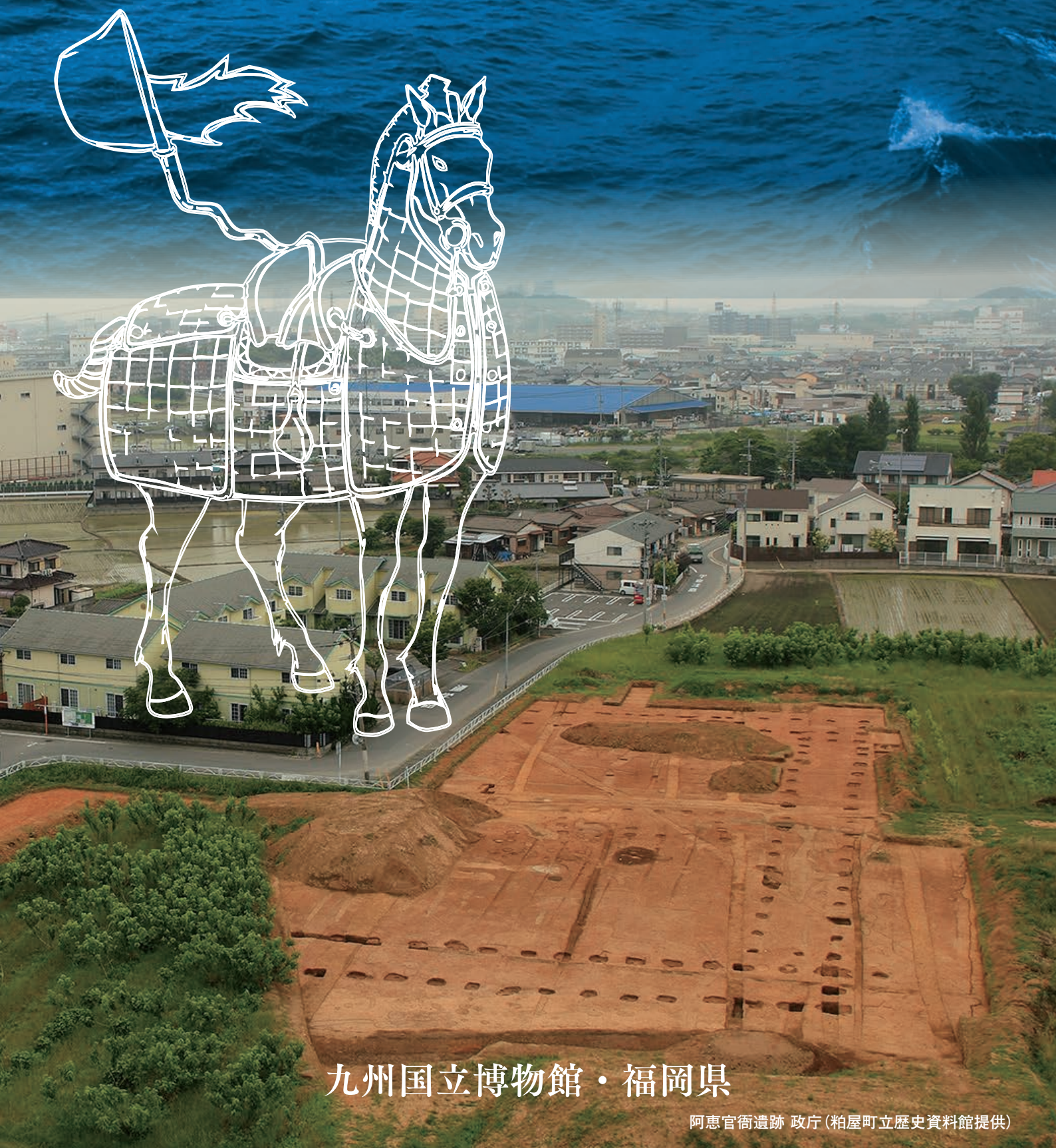
令和6年度 九州国立博物館「大宰府学研究」事業シンポジウム　資料集

海を渡った人馬と国の行く末

～ 筑紫君葛子（つくしのきみくずこ）献上の糟屋屯倉（かすやのみやけ）と国家形成 ～



九州国立博物館・福岡県

阿恵官衙遺跡 政庁（粕屋町立歴史資料館提供）

九州国立博物館「大宰府学研究」事業シンポジウム

海を渡った人馬と国の行く末

―筑紫君葛子献上の糟屋屯倉と国家形成―

令和７(2025)年３月29日(土) 13:00～16:45
九州国立博物館 ミュージアムホール

プ ロ グ ラ ム

12:30~13:00　開場・受付

13:00~13:10　開会行事

13:10~14:00　発表1
「大宰府成立前夜の古代国家の地域支配」
林部　均(国立歴史民俗博物館)

14:00~14:10　休憩

14:10~15:00　発表2
「糟屋評衙阿恵官衙遺跡と糟屋屯倉」
西垣彰博(粕屋町教育委員会)

15:00~15:10　休憩

15:10~16:00　発表3
「ミヤケをつなぐ道」
小嶋　篤(九州歴史資料館)

16:00~16:10　休憩

16:10~16:40　パネルディスカッション

16:40~16:45　閉会行事

ごあいさつ

本日は、九州国立博物館「大宰府学研究」事業シンポジウム「海を渡った人馬と国の行く末　～筑紫君葛子献上の糟屋屯倉と国家形成～」に御参加いただき、ありがとうございます。

西の都大宰府は、西国各地はもとより、海外からも人やものが集まる文化、経済、政治の中心地でした。「日本文化の形成をアジア史的観点から捉える」というコンセプトを掲げる九州国立博物館では、大宰府の歴史的価値を明らかにするため、これまで「大宰府学研究」事業として研究に取り組み、その成果を公開、活用するためシンポジウムや講演会を数多く行ってまいりました。

本日のシンポジウムでは、近年の発掘調査成果として大きなニュースとなり、発掘調査後は、その歴史的重要性から国の史跡に指定された粕屋町阿恵官衙遺跡と行橋市福原長者原官衙遺跡の二つの遺跡を重点的に取り上げます。

これらの官衙（役所）遺跡は、博多湾、京都湾という対外交流や瀬戸内海航路の要衝におかれました。また、白村江の戦いに代表される軍事動員の拠点としても機能していました。このような歴史的背景を踏まえ、阿恵官衙遺跡と福原長者原官衙遺跡を起点に、朝鮮半島諸国をめぐる国際環境や西海道統治に係る国家運営等も交えながら、大宰府成立前夜の社会を明らかにしていくのが本シンポジウムのねらいです。

九州国立博物館は今年開館から20周年を迎えます。大宰府学研究では、これまでの成果をベースに、新たな視点も加え、調査研究を一層進化させてまいりますので、どうぞご期待ください。

令和７年３月29日

九州国立博物館副館長
福岡県立アジア文化交流センター所長
山田　信吾

【講師紹介】

林部　均

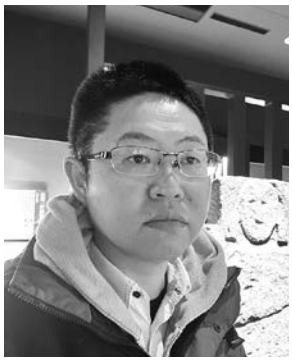
国立歴史民俗博物館

現職は人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部考古研究系教授
専門は日本考古学。1983 年に関西大学文学部を卒業。1983 年から奈良県立橿原考古学研究所にて、飛鳥・藤原京、平城京の調査に携わる。2010 年に人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部考古研究系・准教授。2013 年に同・教授（現在に至る）。2015 年から 2021 年まで、国立歴史民俗博物館研究推進センター長ならびに副館長・研究総主幹。2020 年から東京大学人文社会系大学院客員教授（現在に至る）。主な著書に『古代宮都形成過程の研究』青木書店　2001 年、『飛鳥の宮と藤原京－よみがえる古代王宮－』吉川弘文館　2008 年がある。

西垣　彰博

粕屋町教育委員会

現職は粕屋町教育委員会社会教育課文化財係主幹
1975 年生まれ。鳥取県出身。1999 年、立命館大学文学部日本史学専攻考古学コース卒業。2000 年、粕屋町役場入庁。専門は考古学で、史跡阿恵官衙遺跡、内橋坪見遺跡などの発掘調査を担当。主な関連著作に、「糟屋地域における 7 世紀の集落と古墳の動態について」（『集落と古墳の動態Ⅳ－飛鳥時代－』九州前方後円墳研究会、2023 年）、「糟屋屯倉と評衙」（古代官衙・集落研究会特別研究集会『律令国家成立期の地域変動Ⅰ－筑紫から大宰府へ－研究報告資料』奈良文化財研究所、2024 年）などがある。



小嶋　篤

九州歴史資料館

現職は九州歴史資料館埋蔵文化財調査室大宰府調査班技術主査
専門は日本考古学。2009 年に福岡県教育庁入庁後、大宰府史跡を中心に福岡県内の遺跡調査に携わる。2014 年に福岡大学大学院にて博士（文学）取得。2014 年から 2021 年まで九州国立博物館・展示課研究員として、特別展「宗像・沖ノ島と大和朝廷」（2016 年）、特集展示「筑紫の神と仏」（2020 年）等を担当。2024 年には九州歴史資料館・大宰府調査班員として、特別展「筑紫君一族史」（2024 年）を担当。主な著作に「大宰府の兵器と工房」（『大宰府の研究』高志書院、2018 年）、「九州北部の古墳と集落」（『埴輪生産からみた地域社会の展開』六一書房、2023 年）、「筑紫の社」（『東アジア都城と宗教空間』京都大学学術出版会、2024 年）等がある。

発表 1

大宰府成立前夜の古代国家の地域支配

林部　均（国立歴史民俗博物館）

はじめに

古代国家の西、西海道（九州）支配と朝鮮半島など大陸との外交の窓口となるべく設置された官衙が大宰府である。いっぽう、古代国家の東、東北地方北部には、蝦夷と呼ばれる国家の支配に従わない人々が存在した。それらの人々を支配に組み込んでいくための軍事的な役割と東北地方南部の陸奥国の支配のために設置された官衙が多賀城である。ともに長年にわたる発掘調査･研究により、その実態が明らかとなっている。さらに、近年、それぞれの地域における発掘調査の進展により、その成立前夜の地域支配について、新たな視点から、より具体的な検討が可能となった。

本報告では、福岡県行橋市福原長者原官衙遺跡や宮崎県西都市日向国府跡､宮城県仙台市郡山官衙遺跡等、近年の発掘調査の成果を紹介しつつ、大宰府成立前夜の古代国家の地域支配の実態を考えてみたい（図1)。

図 1　古代国家の西と東

1. 大宰府の成立とその前夜

大宰府は福岡平野の南､四王寺山の麓に造営された官衙遺跡である[1)]。都府楼と呼ばれてきた。もともと、大宰府は、博多湾沿岸におかれた筑紫大宰に由来し、白村江の戦いにより、内陸に移転したものといわれている。7世紀後半に広域を支配する役割を担ったものとして、大宰と総領があった。大宰は筑紫と吉備、総領は東国と筑紫、周防、伊予に置かれていた。大宰と総領の性格について議論はあるが、それらが制度的に筑紫の大宰府として成立するのは大宝元年（701）に制定された大宝令からである[2)]。古代国家最大の地方官衙として、西海道諸国の統括と朝鮮半島や大陸との外交の窓口として機能した。西海道諸国の税などはいったん大宰府に納められた。国家からの命令や、国家への上申も、すべて大宰府を通さなくてはならなかった。西海道のみが他の地域とは、支配システムが異なっていたのである。大宰府が「遠の朝廷」とよばれる所以である[3)]。これが「筑紫君磐井の乱」(527 ～ 528年）にみられるごとく、九州のもつ独立性への古代国家の対応であり、大宰府の最大の役割であった。

大宰府は政庁と周辺官衙とからなり､さらに､その周囲に方形街区が展開していた[4)]。政庁域については、周辺官衙の配置をもとにした様々な議論がみられるが、まずもって政庁域を区画する施設（たとえば大垣等）の検出が必要であろう。なぜならば、平城宮においても宮外においても官衙がみつかっており、官衙の存在だけをもって、政庁域を議論することは、その範囲の目安にはなっても根拠にはならないからである[5)]（図2)。

大宰府の政庁は発掘調査で大まかに3時期の変遷が明らかとなっている[6)]（図3)。礎石建物で屋根に瓦を葺いて、より荘厳になるのがⅡ期政庁からである。大宰府の創建についても『続日本紀』には記録が残らない。出土した地鎮具につかわれた須恵器やⅡ期の政庁正殿の基壇土に含まれる土器の検討から、8世紀

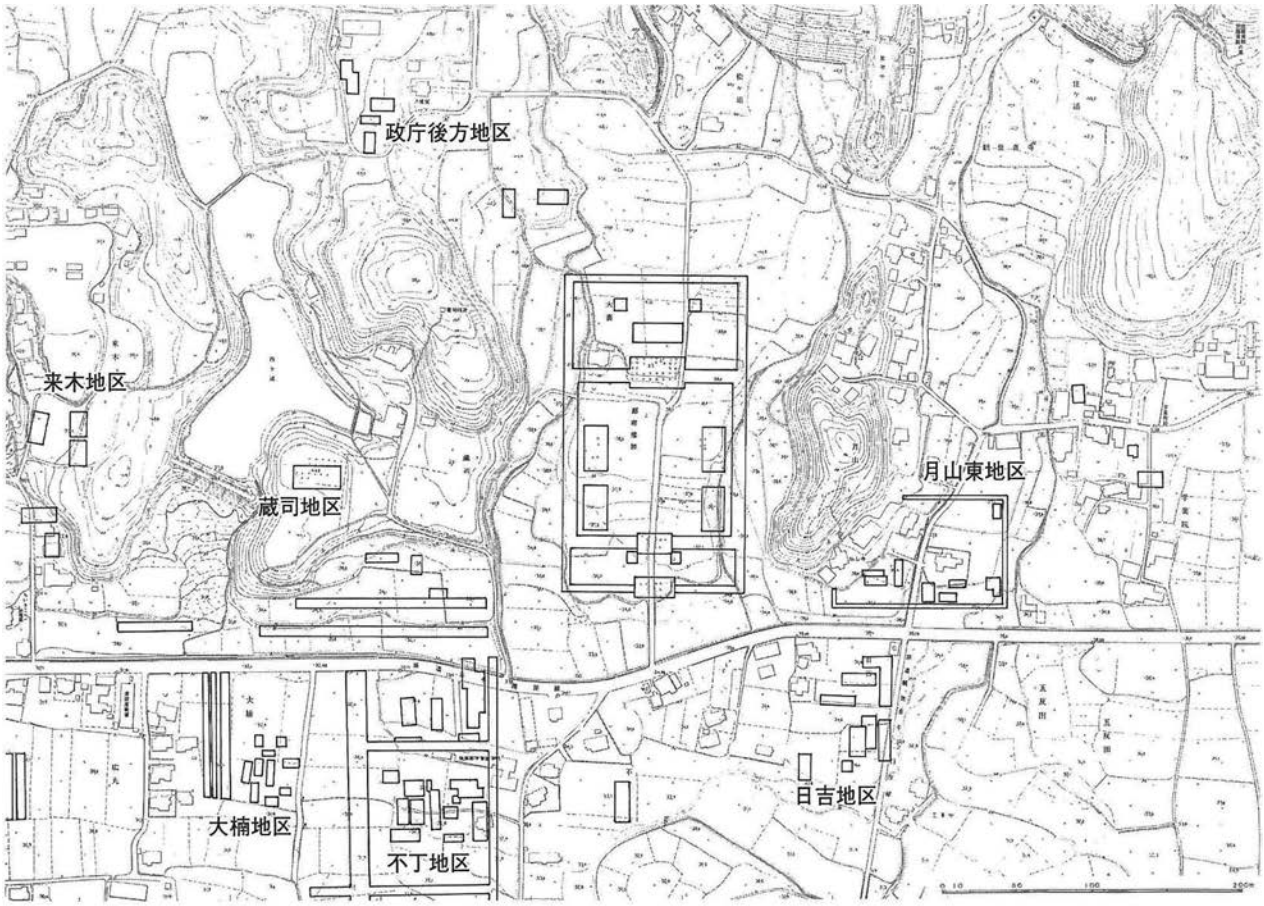


図２　大宰府政庁と周辺官衙

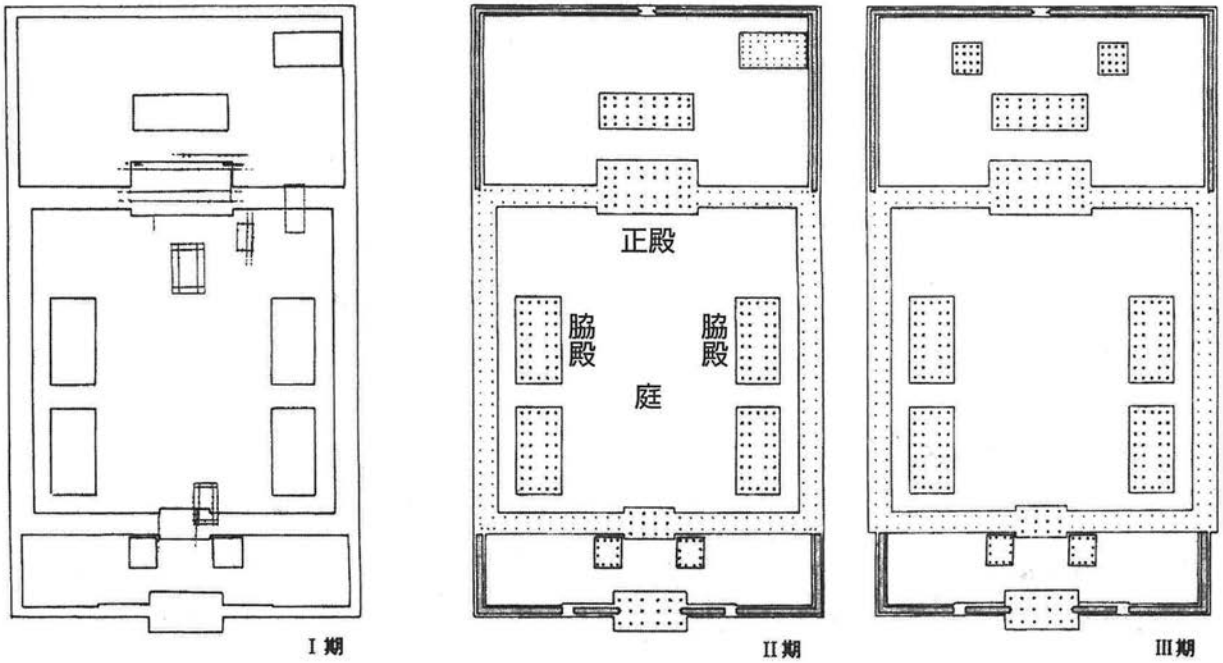


図３　大宰府政庁の変遷

前半にⅡ期政庁は成立したと考えられる。これをもって、私は考古学からみた大宰府の成立とみる[7)]。Ⅰ期については調査に制限があることから、掘立柱建物の一部の検出に留まる[8)]。7世紀終わりのⅠ期の後半には、大規模な建物が検出されており、これが筑紫大宰府であった可能性があるが、7世紀後半までは遡りえない。白村江の戦いのあと、内陸に移転された大宰はどこにあったのであろうか。また、大宰府政庁Ⅰ期に粕屋町阿恵官衙遺跡のⅡ期政庁が成立した。

大宰府は強大な権力をもった役所であった。西海道諸国へも大きな影響を及ぼした。そのためであろうか、西海道をめぐる古代史は、大宰府を中心に組み立てられることが多い。実際、大宰府が中心となって様々なことが展開したことは多い。私も否定はしない。大宰府のもつ重要性も否定しない。しかし、ほんとうに大宰府に収斂させてよいのだろうか、もっと多様な視点があってもいいのではないかと常日頃から思っていた。これまでは、大宰府から西海道諸国をみるという視点が多かったが、西海道諸国から大宰府、そして王宮・王都をみる視点も必要ではないかと考える。

2010年、東九州自動車道の建設にともなって一つの遺跡の発掘調査がおこなわれた。福岡県行橋市にある福原長者原官衙遺跡である[9]（図4）。政庁は一辺約150mのほぼ正方形に回廊状の区画施設をめぐらしたもので、その内部では正殿らしき建物も見つかっている。この区画施設の外側には、空閑地と外濠がめぐっている。王宮がほぼ正方形になることや、王宮の周囲に空閑地や外濠をもつのは、王宮では藤原宮の特徴である。福原長者原官衙遺跡は、規模は異なるとはいえ、共通した特徴をもつことから、藤原宮をモデルにして造営された官衙とみてよい[10]。その造営時期は、藤原宮とのかかわりから8世紀はじめであり、確

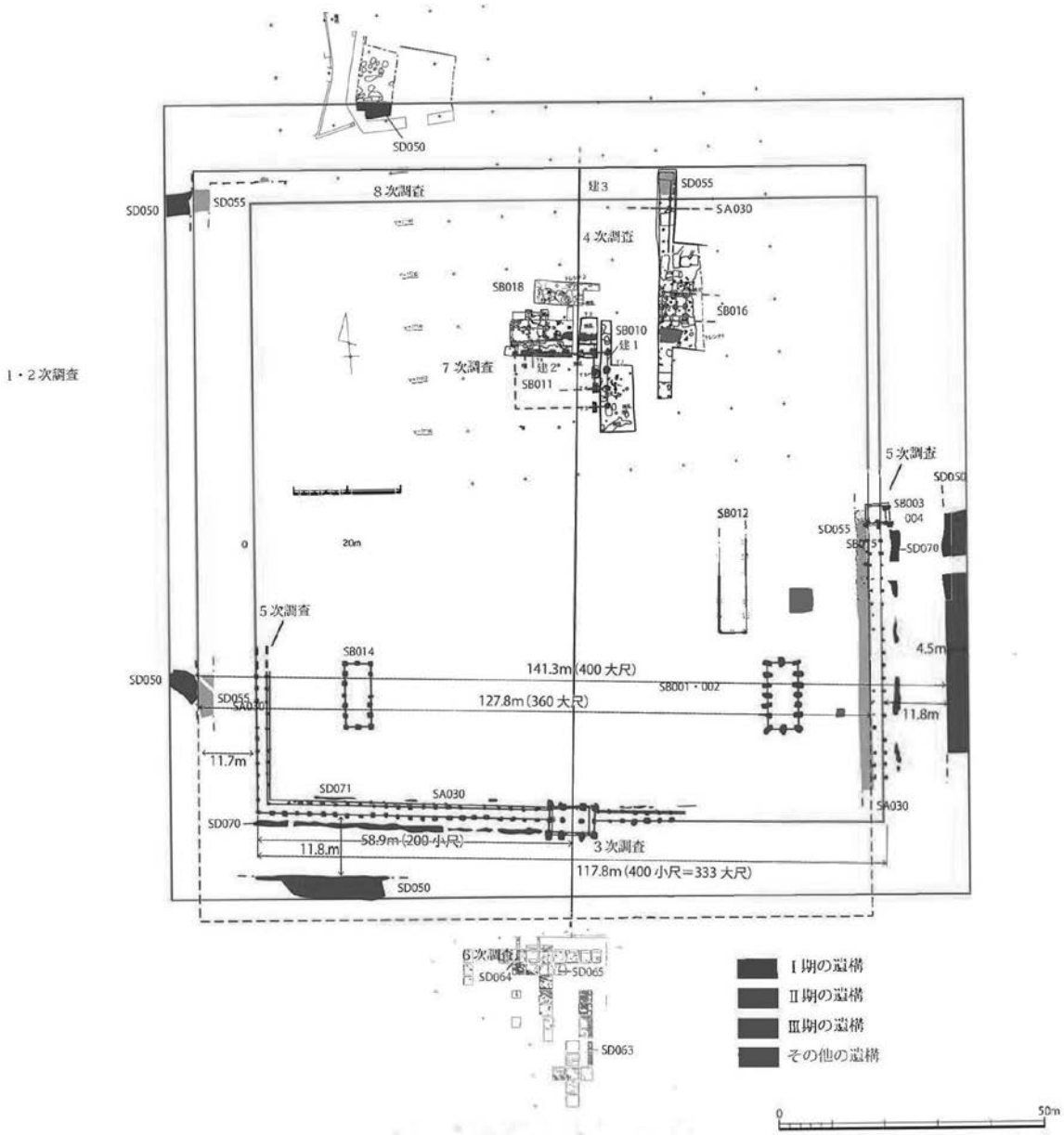


図４　福原長者原官衙遺跡　全体図

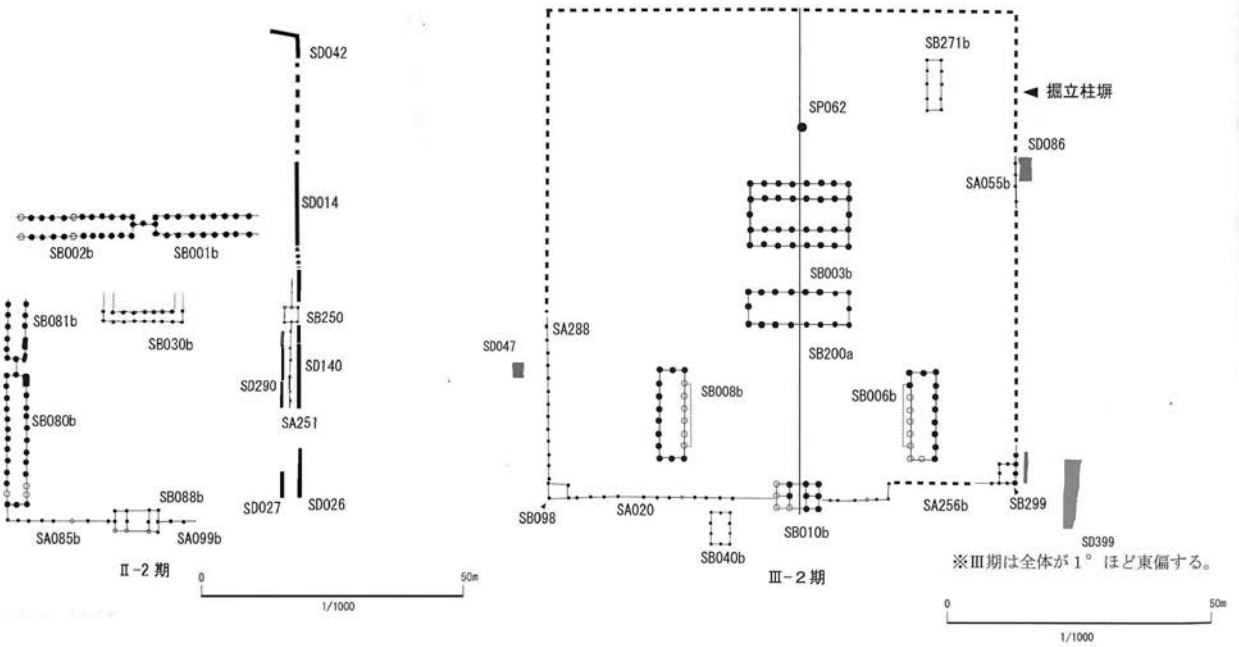


図５　日向国府跡の発掘調査（左がII-2 期、右がIII -2 期）

実に大宰府政庁Ⅱ期の成立に先行する。大宰府が荘厳に整備されるⅡ期政庁よりも年代的に遡り、それに匹敵する規模をもつ地域支配のための役所の存在が明らかとなったのである。福原長者原官衙遺跡は、8世紀前半から中ごろで消滅する。これをもって地域支配が大宰府に収斂されたとみることもできるかもしれないが、西海道の地域支配も、当初から、すべてが大宰府中心ではなく、複雑な経緯を経たことは明らかである。福原長者原官衙遺跡をどのような性格の官衙遺跡とみるかには、様々な意見がある。豊前国府の前身とする意見もあるが、大宰府政庁Ⅱ期の成立に先行する巨大な官衙遺跡として、九州南部の隼人や朝鮮半島とのかかわりや、西海道支配に関係して、何か特別な任務を負った役所の可能性を私は考えたい。いずれにしても、これまで大宰府中心で組み立てられてきた西海道支配について、それだけでは片づけられない問題を提起していることは間違いない。

また、近年、宮崎県西都市に位置する日向国府跡（寺崎遺跡）の調査が進展し、日向国府の成立と展開過程が明らかとなりつつある[11]（図5）。初期の日向国府は、北辺と西辺に長舎状の掘立柱建物を2棟ずつ配置し、東辺を掘立柱塀、南に門をおく、一辺約56mの方形の区画をつくり、内部の北寄りに正殿をもつ。長舎状の掘立柱建物で空間を区画することも変則的ならば、正殿も東西偶数間と特異である。7世紀末から8世紀前半には成立していたと推定されている。また、日向国府跡では7世紀後半から8世紀前半にかけての畿内、とくに都であった飛鳥・藤原地域で使われた土師器（畿内産土師器）が搬入されている[12]。日向国府も大宰府政庁Ⅱ期の成立に先行する可能性をもつ。すなわち大宰府よりはるか南の地域において、すでに国府が成立していたのである。日向国府が正殿と脇殿をもつ、いわゆる品字型の定型化した国府に建て替えられるのは8世紀中ごろ以降である。日向国府の成立、変遷過程も、西海道地域を古代国家がいかに支配に組み込んだのかを考えるうえで、重要な調査成果である。

２.多賀城の成立とその前夜

多賀城は、仙台平野の北辺、宮城県多賀城市に所在する官衙遺跡である[13]。陸奥国府であるとともに、東北地方の蝦夷に対する軍事的な拠点であった。多賀城には役所の中枢である政庁と、その周囲を取り囲む外郭が存在する（図6）。政庁を外郭が囲む構造は、多賀城以外の国府には見られず、多賀城の城柵としての軍事的機能を端的に示すものである。政庁は、8世紀前半から10世紀中ごろまで、4時期の変遷が確認

されている。政庁を実務のうえから支えた役所は、外郭の中の各所に配置された。また、多賀城南面には、南北大路を中心に8世紀後半頃から方形街区が形成されるようになる（市川橋遺跡・山王遺跡）[14]。

ところで多賀城の創建にかかわる記録は、『続日本紀』には見られない。多賀城外郭南門のすぐ北西に多賀城碑と呼ばれる石碑がある。江戸時代の元禄年間に掘り出されたもので、現在は覆屋をかけられている。多賀城碑は、天平宝字4年（762）に藤原朝獦が多賀城を荘厳に整備したことを記念して建てられた顕彰碑である[15]。それによると、多賀城は大野東人によって神亀元年（724）に修造されたことがわかる。発掘調査でも、それを裏付ける木簡などが出土しており、大まかに、多賀城政庁Ⅰ期は、この時期に造営されたと考えてよい[16]。奈良時代前半には、古代国家の地域支配が、東北地方南部にまでおよんでいたことを意味する。

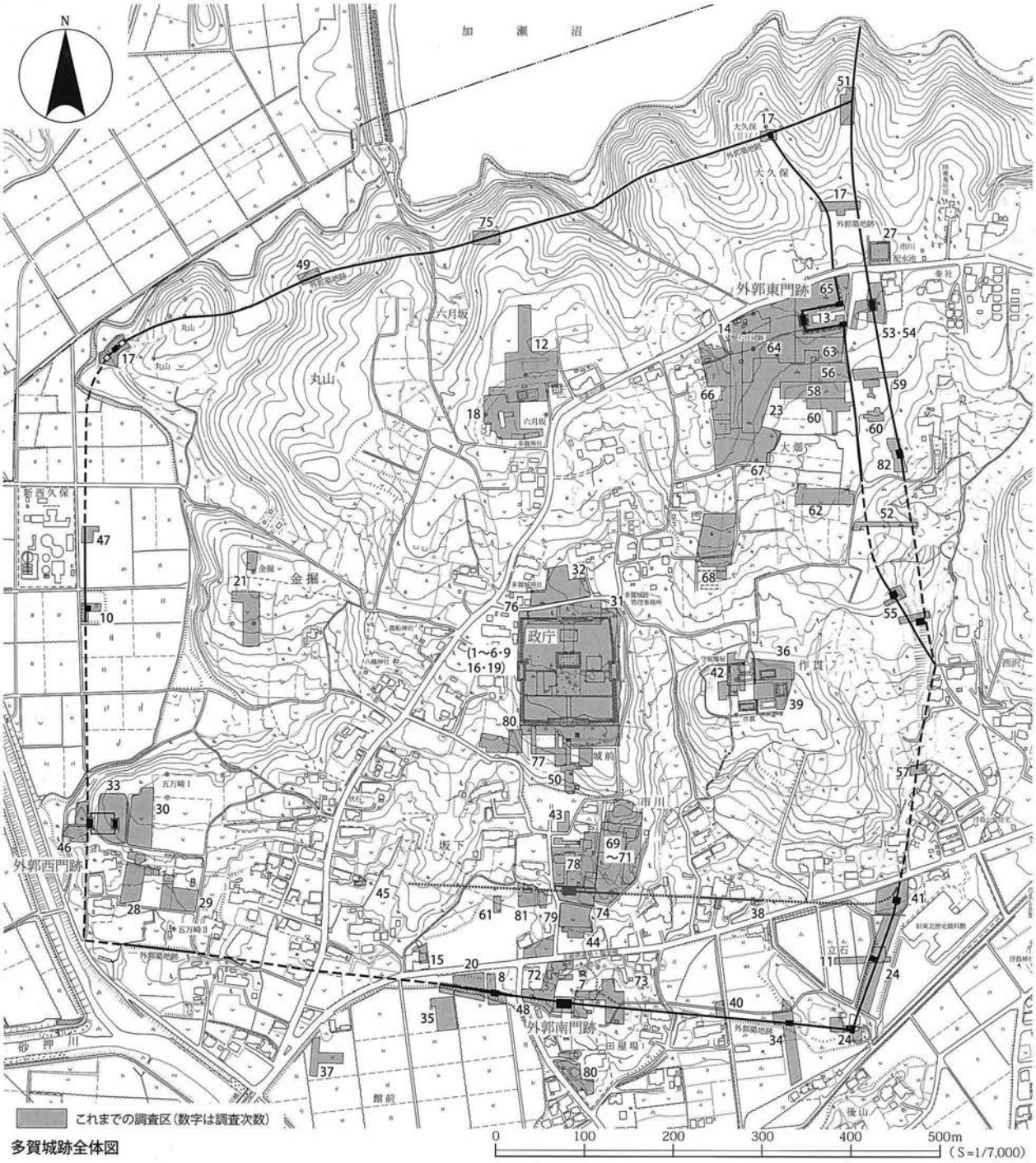


図６　多賀城跡　全体図

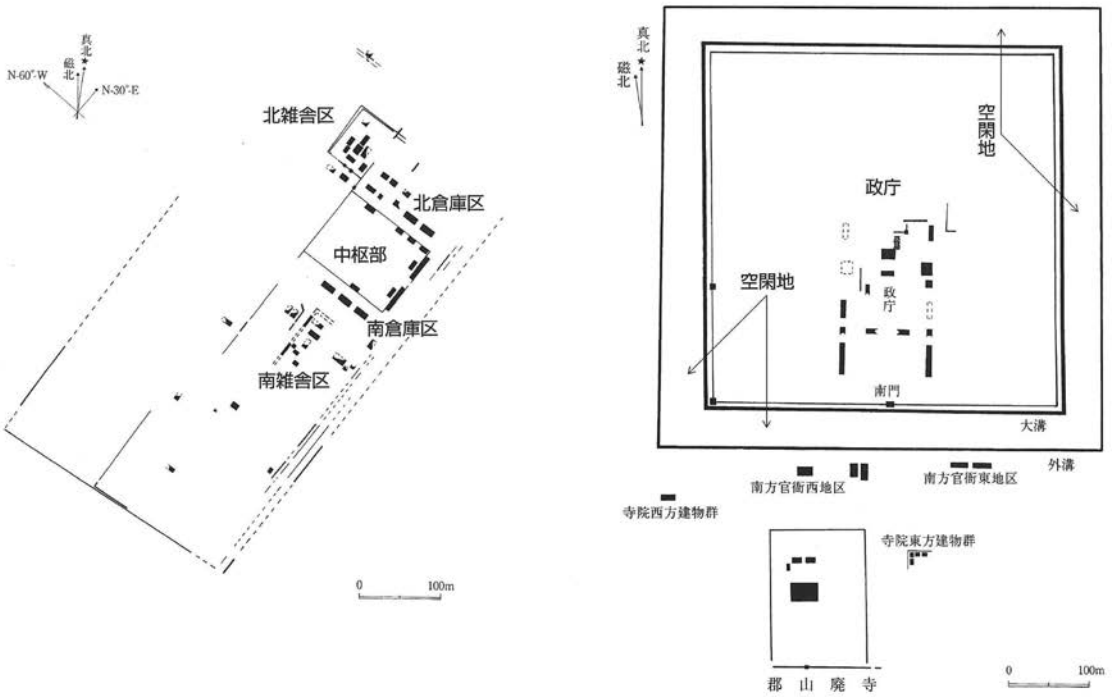


図７　仙台郡山官衙遺跡（左がⅠ期官衙、右がⅡ期官衙）

しかし、この30年の発掘調査の進展により、多賀城の創建をさらに遡る官衙遺跡の存在が知られるようになった。多賀城が位置する同じ仙台平野でも多賀城から南へ約20kmの仙台市長町に所在する仙台郡山官衙遺跡である[17]。発掘調査で2時期の官衙遺構がみつかっている。Ⅰ期官衙は大きく傾きをもった建物群で、いくつかのブロックに分かれている。7世紀中ごろの造営で、城柵と考えられている。Ⅱ期官衙は、7世紀後半から末にⅠ期を全面的に建て替えたもので、東西約428m、南北約423mの方形の区画施設の中に東西棟の正殿をはじめとして、儀式をおこなうための広場や、それを取り囲んで建物を配置している。また、正殿の背後には、蝦夷の饗宴のために使ったと推定される方形地などがみつかっている。多賀城に先行する初期の陸奥国府と推定される（図7）。その大きさは、ちょうど藤原宮を1/4にしたものであり、外郭施設の外側をめぐる大溝や空閑地の存在は、藤原宮のそれと、まったく同じである。Ⅱ期官衙は藤原宮をモデルに造営された[18]。

これまでの古代国家による東北地方の支配は、多賀城の創建がひとつの画期として考えられていたが、7世紀中ごろくらいから、まず城柵がつくられ、そして、7世紀終わりには、藤原宮をモデルにした多賀城に先行する陸奥国府が造営され、多賀城へと発展していることが明らかとなった。その展開過程は、古代国家の東北地方の蝦夷政策とも深くかかわる[19]。古代国家が東北地方をいかに支配に組み込んでいくかということで、重要な成果と考える。

さらに多賀城では、その創建期（政庁Ⅰ期）の外郭のかたちが、政庁Ⅱ期以降の外郭とは異なることが最近明らかとなった。外郭南門と政庁南門の間で門に相当する施設と、区画施設の一部が検出されたからである[20]（図8）。西辺と北辺の位置は確定できないが、政庁Ⅱ期以降の外郭と異なったかたちをしていたことは間違いない。また、政庁周辺においても、下層遺構が存在することがわかってきているので、いまだ、初期の陸奥国府である郡山遺跡Ⅱ期官衙から、多賀城にどのように展開しているのかは不明な点が多い。ただ、こういったことを解明していく中で、古代国家の東北支配の具体的な様相が明らかとなると思われる。

図８　近年の多賀城跡南辺の調査と外郭南辺

おわりに

ところで、仙台郡山官衙遺跡、福原長者原官衙遺跡ともに、藤原宮をモデルにしていた（図9）。そういった官衙が、古代国家の東と西で呼応するかのように出現してくることは、古代国家が、地域支配を進めていくうえで、どの地域を重要視していたのかが明らかとなる。古代国家の地域支配は、画一的に進められたのではなく、地域の拠点となるところにまず役所をつくり、そこを核として進められたのではなかろうか。それが、大宰府成立前夜の地域支配の実像であり、それにかかわる遺跡が古代国家の西では福原長者原遺跡、日向国府跡、古代国家の東では仙台郡山官衙遺跡であった。

ここでは、古代国家の西の支配拠点である大宰府、東の支配拠点である多賀城の成立過程を見ていく中で、近年の調査成果を紹介し、それぞれの地域社会での支配の確立が、それほど単純なものではなかったことを指摘した。それは、それぞれの地域のもつ特性に合わせた支配システムの構築であった。今後もこのような視点からの発掘調査・研究が必要であろう。そうすることにより、古代国家の地域支配の具体的な様相が明らかとなるであろう。

[追記]なお、本稿は、2020年2月29日に明治大学アカデミーホールで開催予定であった大宰府史跡指定100年記念フォーラム『大宰府と多賀城』、2021年3月6日に九州歴史資料館で開催予定であった大宰府史跡100年記念シンポジウム『律令国家と大宰府史跡』（ともに新型コロナ感染拡大のため中止）、それらをまとめた林部均「多賀城・大宰府の成立と古代国家」『大宰府史跡指定100年と研究の歩み』（九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集　第2集 2021年）を再構成し、新たな知見を加えるとともに、誤りを修正したものである。

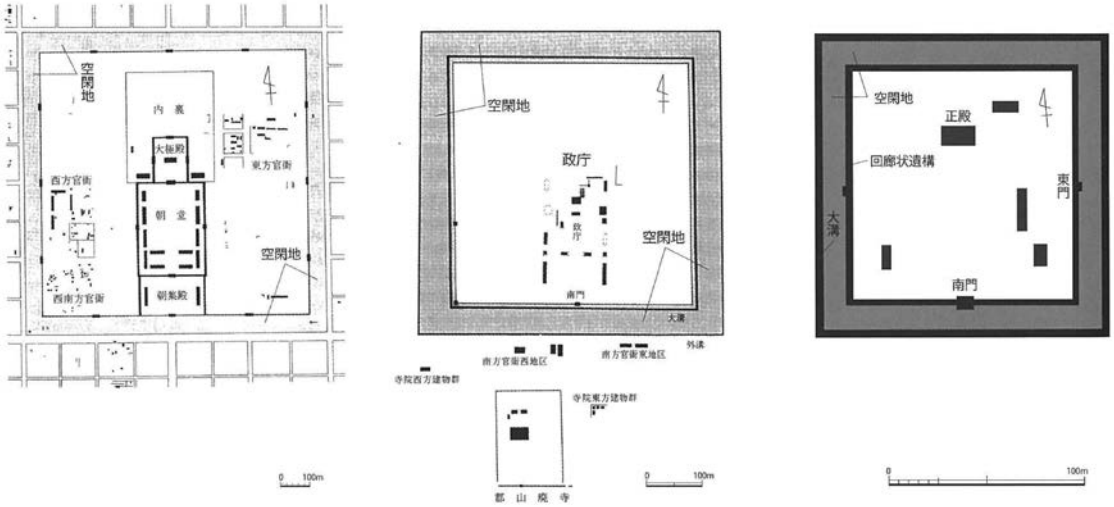


図９　藤原宮（左）と仙台郡山官衙遺跡（中）、福原長者原官衙遺跡（右）の空閑地と外溝・大溝

註

1）鏡山猛1968『大宰府都城の研究』風間書房、藤井功・亀井明徳1977『西都大宰府』日本放送出版協会、九州歴史資料館1998『大宰府復元』、九州歴史資料館2002『大宰府政庁跡』、九州歴史資料館2010『大宰府－その栄華と軌跡－』、九州歴史資料館2018『大宰府史跡発掘50年』、大宰府史跡発掘50周年記念論文集刊行会編2018『大宰府の研究』高志書院、九州歴史資料館2018『特別史跡大宰府跡』（大宰府史跡ガイドブック3）

2）酒井芳司2024『大宰府の成立と古代豪族』同成社

3）倉住靖彦1985『古代の大宰府』吉川弘文館、酒井芳司2018「不丁地区出土木簡からみた西海道統治の実態」『木簡による西海道統治の実態に関する研究』九州歴史資料館、松川博一2022『古代大宰府の政治と軍事』同成社

4）井上信正2018「大宰府条坊論」『大宰府の研究』高志書院

5）このことは、2024年2月3日に九州歴史資料館でおこなった企画展「重要文化財で語る古代大宰府」開催記念講演「日本古代の都城と大宰府－遺構と出土品から考える―」にて指摘した。

6）九州歴史資料館2002『大宰府政庁跡』

7）ここでは、制度的な大宰府の成立（701年）と、考古学から発掘調査でみつかる遺構の上からわかる役所の施設としての大宰府の成立（710年代後半）には、若干のタイムラグがあることを指摘しておく。

8）杉原敏之2007「大宰府政庁のⅠ期について」『九州歴史資料館研究論集』32

9）九州歴史資料館2014『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』13、行橋市教育委員会2016『福原長者原遺跡』

10）林部均2016「政庁周囲の空閑地と大溝」『福原長者原遺跡』2、林部均2017「福原長者原遺跡と藤原宮・仙台郡山官衙遺跡」『豊前国府誕生－福原長者原遺跡とその時代－』行橋市教育委員会

11）津曲大祐2013「日向国府跡の調査」『条里制・古代都市研究』29、西都市教育委員会編2020『日向国府跡　平成23～30年度国庁確認調査総括報告書』西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第74集

12）宮崎県埋蔵文化財センターにおいて著者が調査。未報告。

13）宮城県多賀城跡調査研究所1982『多賀城政庁跡』、宮城県多賀城跡調査研究所2010『多賀城政庁跡－補遺編－』、宮城県多賀城跡調査研究所2017『多賀城跡　外郭線Ⅰ－南門地区－』、東北歴史博物館2024『多賀城1300年』

14）多賀城市埋蔵文化財センター 2024『古代都市　多賀城』

15）阿倍辰夫・平川南編1999『多賀城碑－その謎を解く－[増補版]』雄山閣出版

16）平川南1993「多賀城の創建年代」『古代地方木簡の研究』吉川弘文館

17）仙台市教育委員会2005『郡山遺跡発掘調査報告書－総括編－』、長島栄一『郡山遺跡』（日本の古代遺跡35）　同成社

18）林部均2008「飛鳥・藤原京から見た郡山遺跡・多賀城」『第34回古代城柵官衙遺跡検討会－資料集－』、林部均2011「古代宮都と郡山遺跡・多賀城」『国立歴史民俗博物館研究報告』第163集、今泉隆雄2015「古代国家と郡山遺跡」『古代国家の東北辺境支配』吉川弘文館

19）今泉隆雄2015「多賀城の創建－郡山遺跡から多賀城へ－」『古代国家と東北辺境支配』吉川弘文館

20）林部均2008「飛鳥･藤原京から見た郡山遺跡･多賀城」『第34回古代城柵官衙遺跡検討会－資料集－』において､はじめて指摘した。林部均2011「古代宮都と郡山遺跡・多賀城」『国立歴史民俗博物館研究報告』第163集。また、その発掘調査成果は、宮城県多賀城跡調査研究所1982・2007・2010『宮城県多賀城跡調査研究所年報1981・2006・2009』、その後も調査による確認が続いている。

発表２

糟屋評衙阿恵官衙遺跡と糟屋屯倉

西垣　彰博（粕屋町教育委員会）

はじめに　ー糟屋屯倉とはー

糟屋屯倉は、『日本書紀』継体22年（528）の「筑紫君葛子、恐坐父誅、獻糟屋屯倉、求贖死罪。」記事で、筑紫君磐井の乱に連座して息子の葛子が死罪を免れるために献上したとして登場する。これは「糟屋」の地名の初見でもある。ミヤケとは、官衙的な建物や倉庫など政治的軍事的拠点、付属する田畑など農業経営の拠点、人間集団に対する貢納奉仕の拠点といった性格を重層的にもっていたと考えられるが、いずれにせよ糟屋屯倉は、磐井の乱を平定して外交権の一元化を進めた倭政権にとって、葛子の連座を不問にするほど重視したものであった。

那津官家に比定される比恵遺跡などでみられるミヤケ遺構（三本柱柵など）は糟屋地域[1]では確認されておらず、糟屋屯倉の所在地は不明ながらも、現在の行政区画「糟屋郡」を遺称地として、糟屋地域に糟屋屯倉が存在したと考える。阿恵官衙遺跡で糟屋評衙が発見され、糟屋屯倉の後継といえる糟屋評衙近辺を糟屋屯倉の比定地とする論も出されている（坂上2018）。それを傍証するように、阿恵官衙遺跡周辺の発掘調査によって、糟屋屯倉に関連すると思われる遺跡の調査例が多く蓄積されている。これらの調査成果をもとに、糟屋評衙阿恵官衙遺跡と糟屋屯倉関連遺跡について検討する。

１．鶴見塚古墳　ー糟屋屯倉の時代の首長墓ー

鶴見塚古墳は阿恵官衙遺跡正倉域の東約200ｍの丘陵先端部に位置する６世紀中頃の前方後円墳である（図1）。前方部の一部と後円部を失っているが、近世地誌『筑前国続風土記拾遺』に記載された鶴見塚古墳と東光寺剣塚古墳（福岡市）の墳丘・石室の寸法がほぼ同じであり、石棺についても両者とも前面の側石がないという記録から、鶴見塚古墳は東光寺剣塚古墳と同程度の墳丘規模で主体部には石屋形が採用されていたとみられる。推定全長は東光寺剣塚古墳と同じ70ｍ以上とし、後円部が残っていないものの周辺地形の起伏、古い航空写真等からこの全長規模は大きく矛盾しないと考えている。鶴見塚古墳は博多湾沿岸を代表する首長墳である。

鶴見塚古墳築造から１世紀が過ぎた頃、阿恵官衙遺跡に糟屋評衙が造営される。律令国家の権威を象徴する正倉群と前時代の首長墳である鶴見塚古墳の間を、大規模な公共事業として整備された古代道路が通過するという位置関係は、官衙のグランドデザインのなかに鶴見塚古墳も組み込まれていることを示すものである。阿恵官衙遺跡の成立背景に鶴見塚古墳が重要な意味をもつことが分かる。

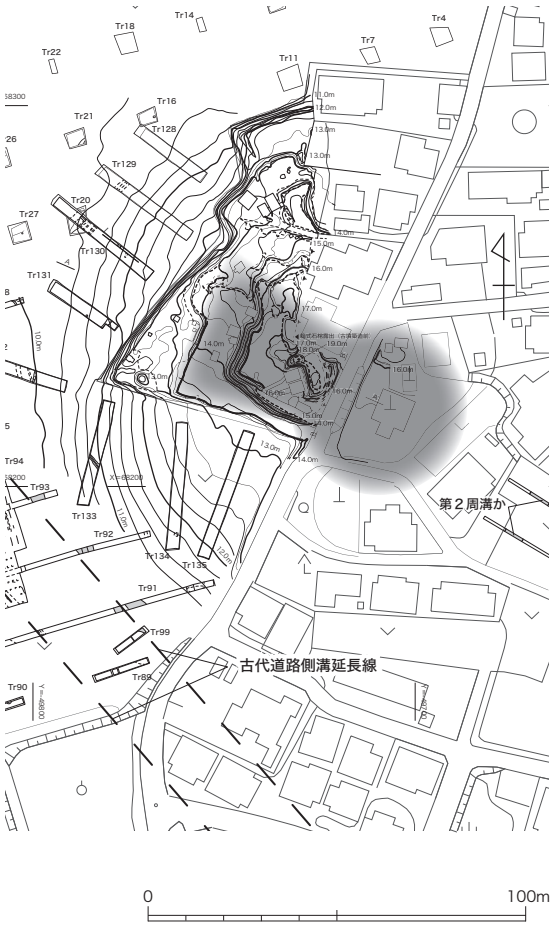


図１　鶴見塚古墳平面図（1/2,000）

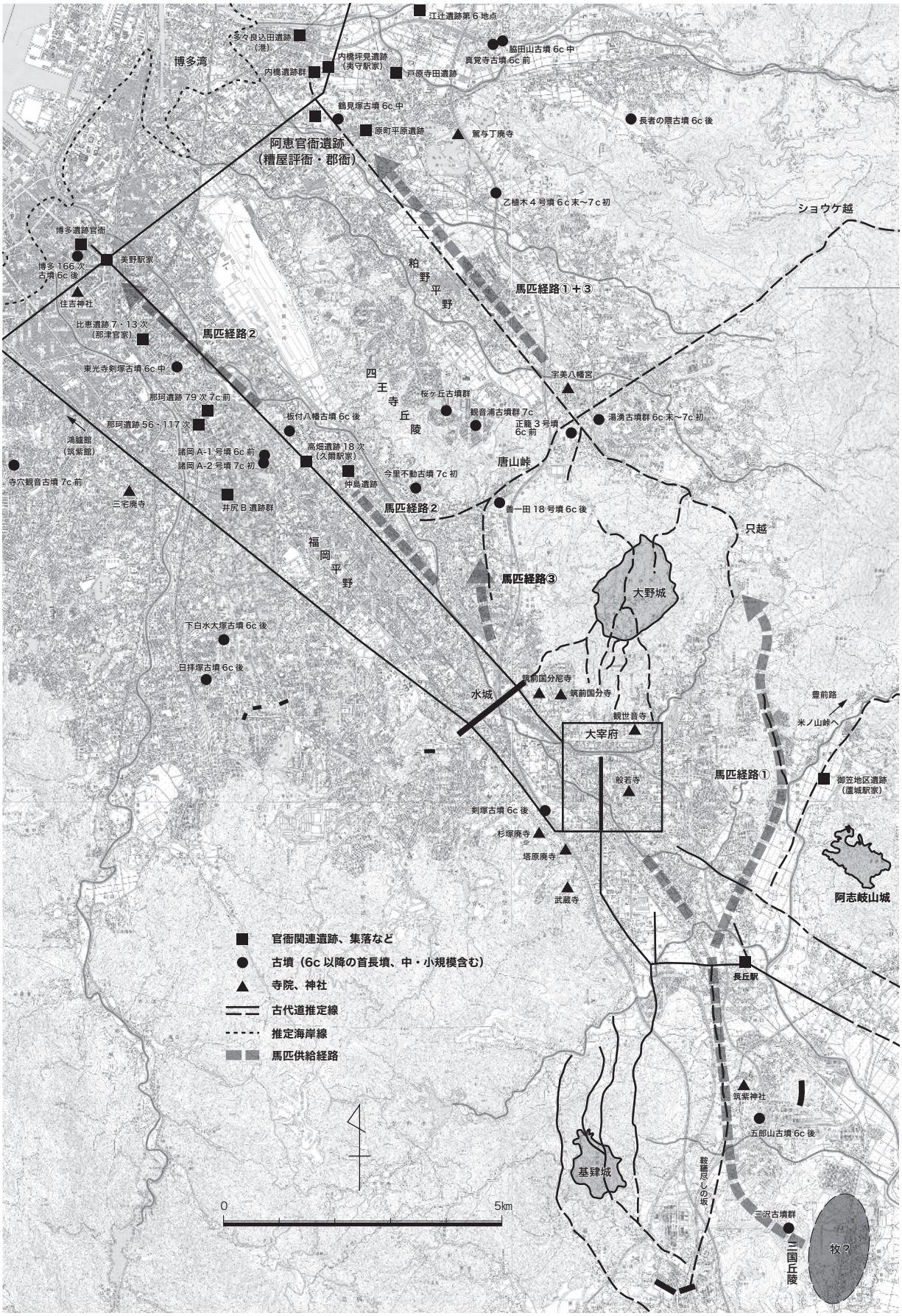


図２　博多湾～三国丘陵関連遺跡位置図（1/100,000）　西垣 2024b（小鹿野・川口 2021 と小嶋 2024 を参考に作成）

2. 戸原寺田遺跡　ー鶴見塚古墳を支えた集団ー

戸原寺田遺跡は、鶴見塚古墳の北東約1.4km、多々良川沿いの低丘陵に位置し、埠頭遺構を備えて紡績・鍛冶などの手工業生産を行っていた遺跡である（図2、写真1・2）。主要時期は６世紀中頃～７世紀第１四半期であるが、５世紀代の遺物もあり、磐井の乱以前に成立していた可能性がある。なお、戸原寺田遺跡の調査地は集落の縁辺に過ぎず、居住域は不明である。

写真１　戸原寺田遺跡と多々良川

写真２　戸原寺田遺跡の埠頭遺構

主な遺構は竪穴建物４軒、掘立柱建物６棟、溝、土坑、埠頭遺構、運河状の溝がある。出土遺物量は粕屋町内過去最多で、完形に近い遺物が多く、破片であっても大ぶりで摩滅を受けていない保存状態の良いものばかりで、遺跡の性格が極めて異質である。

渡来人との関連が指摘される排水溝付竪穴建物は6世紀後半で、朝鮮半島系遺物は遺跡全体から新羅土器、陶質土器、軟質土器が出土している。その他にも紡織を示す木製品の地機（じばた）・枠（かせ）、滑石製紡錘車があり、製糸、糸巻、機織りの一連の工程作業が行われていた。また、鍛冶遺構とともに銅と錫を含む鉄滓が確認され、鉄だけではなく青銅の複合品も作られていたとみられる。これら手工業生産は渡来系の技術によるものであろう。

そして注目すべきは、多々良川に接して運河状の溝と埠頭遺構を備えていることである（写真2）。運河状の溝は流水による土砂の流出を防ぐため、溝底に樹皮を敷き詰めている。曳舟による物資運搬に使われたと考えられる。運河状の溝は６世紀後半に埋没するが代わって埠頭遺構がつくられる。埠頭遺構は多々良川に面して開口部を設け、船を着岸できるようにドック状の浅瀬を造成している。これらは手工業生産に伴う物資の搬入・搬出・収容等に供するために戸原寺田遺跡の集団によってつくられたものである。埠頭遺構は、７世紀第１四半期頃まで利用されたとみられるが、７世紀第２四半期には遺跡の遺構・遺物も激減し、埠頭遺構は既に埋没している。戸原寺田遺跡の周辺には倉が10棟以上見つかっていて、物資の収容量が一般集落とは明らかに異なる。しかも集落縁辺の1,500㎡に満たない調査で、須恵器大甕をはじめとする貯蔵具類が完形に近い状態でまとまって出土するのは稀で、埠頭遺構を中心に内容物の搬入・搬出・収容が行われたことを示している。また、馬歯の出土もあり、馬が物資の運搬等に従事したのであろう。製塩土器の出土は馬の飼育に塩を必要としたことによる。

排水溝付竪穴建物、朝鮮半島系遺物、手工業生産などから渡来人の存在が確実視でき、多量の貯蔵具類を伴うことに加えて、筑後川流域で盛行する須恵器の模倣杯などの搬入品もあり、良品の須恵器を数多く取得できる経済的優位性も考慮すると、糟屋地域の中で中核的な集落であったことに疑いの余地はなく、博多湾沿岸における代表的な拠点集落の一つといえる。以上の検証から、戸原寺田遺跡は博多湾沿岸を代表する首長墳である鶴見塚古墳を支えた集団の拠点とするのが適当と考える。

3．内橋遺跡群　ー糟屋屯倉の軍事活動ー

（1）内橋遺跡群の概要

内橋遺跡群は多々良川河口に近い低丘陵上に展開し、６世紀後半から７世紀前半にかけて職能的な食材加工と馬匹管理の形跡が明らかになった遺跡群である。内橋遺跡群に集落が出現するのは６世紀後半であるが、盛期は７世紀前半に迎える。７世紀中頃には遺構･遺物が激減し、この時期に集落消長の画期がある。内橋遺跡群の特徴は、新羅土器、緑釉陶器壺、有溝把手付土器など朝鮮半島系の遺物が集中して出土することがあげられる。特に有溝把手付土器が集中するのは、ミヤケ関連施設が検出されている有田遺跡（福岡市）、那津官家設置を契機に出現して渡来人を擁する手工業集落と評価される薬師の森遺跡（大野城市）などに限られる。内橋遺跡群にも渡来系集団の存在が確実視できる。

（2）食材加工について

内橋柚ノ木（いおのき）遺跡では、７世紀前半に排水溝を伴う石敷遺構と井戸がセットで検出されていて、洗い場としての機能が考えられる。遺跡のなかで、これら井戸・石敷遺構・排水溝のみに明褐色砂質土が堆積していた。「砂」の堆積がこれらの遺構に限定されるのは、外部から運び込まれた何かを井戸の水を使って石敷遺構で洗い流し、付着していた粒の大きい「砂」だけが流れきれずに石敷遺構と排水溝付近に堆積したためで、これらの遺構は一連の作業工程のなかで使用されたものと判断できる。遺跡内で鉄製大型釣針（写真3）、大型土錘、半球形有孔石製品が出土していることから、大型魚も対象とした漁や地引網漁を行っていたとみられ、収穫した海産物をこの洗い場で洗っていたことが推測される。井戸は谷が開析する丘陵の端に位置し、洗い場の排水溝は汚れた水を流すため谷に直結している。また、付近に馬歯が散乱することから解体した斃馬も遺棄されている。解体の際も井戸の水を使用したのであろう。

写真３　内橋柚ノ木遺跡の有溝把手・甑把手と鉄製大型釣針

内橋柚ノ木遺跡から北西約600mの多々良川沿いに港湾施設とみられる多々良込田遺跡がある。港湾施設としての主な時期は８世紀以降であるが、古墳時代前期においても外来系の土器が搬入される遺跡であり、歴史的に多々良川河口の津として利用されてきた地点である。内橋遺跡群の漁労活動においても、出港するために多々良込田遺跡付近を利用していたことが推測できる。

また、内橋柚ノ木遺跡では土師器の甑か鍋の把手が46点出土していることも重要である（写真3）。仮に46点すべてが二対一組なると最小限に見積もったとしても23個体分の数になる。これは糟屋地域における遺跡の出土量としては突出した数である。しかも内橋遺跡群は居住域ではない。つまり、漁労活動・海産物の洗浄作業と合わせて、大量の甑や鍋は職能的な食材加工を示す遺物であり、保存食などの供給が行われたと考えられる。このような大量の食材加工は糟屋屯倉に連動した伴造と部民の活動と思われ、その目的としては、「隋使（608 ～）饗応を念頭においた那津官家の筑紫大宰への再編が行われた」とし、屯倉では「軍粮・使節饗応どちらにも対応できる魚の干物・塩辛や干飯・酒など加工食品の供給・備蓄体制」が整備された（桃﨑2019）という指摘が参考になる。

(3) 馬骨の出土について

馬骨をはじめとする獣骨が多数出土していることも注目される。馬歯、下顎骨、肩甲骨、橈骨、尺骨、中足骨等があり、切断痕と思われるものもある。これらは6世紀後半～7世紀前半とみられ、斃牛馬を解体して遺棄したと考えられる。なお、馬埋葬土坑の可能性がある遺構が1基検出されている。

内橋遺跡群でみられる食材加工と馬の関係に類似した事例としては、『日本書紀』欽明天皇7年7月条に紀伊国の漁者が大和盆地まで贄を馬で運ぶ記述や、『肥前国風土記』の御贄貢上の由来伝承譚を踏まえて、アワビの加工場とされる長崎県宇久島の宮ノ首遺跡付近に牧の存在が想定されることから（河野2022）、内橋遺跡群で馬骨が集中する要因を食材加工に伴う物資運搬に求めることは蓋然性が高いと思われる。斃死したあとに解体処理がおこなわれたのであろう。ただし内橋遺跡群はそれだけではなく、倭政権が半島への馬匹供与を行う際の出港前の集積地だったと推定しており、それら斃馬の馬骨も多く含まれていると考える。

(4) 馬匹管理について

馬匹管理に関連する遺構として、幅の細い弧を描き、底にピットをもつ7世紀前半の溝がある。溝内に板を据え付け、ピットに建てた柱に固定して塀のように利用したと考えられる。溝で囲われた内部に主な遺構はなく、馬を放していたと推測する。同様の遺構は秋田県縄手下遺跡（吉川2006）でも板塀跡として報告され、牧の一種として利用されたことが推定されている。

この遺構がみられる背景としては、ミヤケの設置以降、『日本書紀』に朝鮮半島への出兵・馬匹供与の記事が多くなることから、馬飼集団の居住が推定される小郡市三国丘陵付近で調教された馬が、糟屋屯倉を通過し、沿岸部から朝鮮半島に搬出され、その港湾の近くには馬匹の集積地も有ったのではという指摘（桃﨑2012）に注目したい。内橋遺跡群の隣には博多湾を代表する津の多々良込田遺跡がある。津の最寄りの低丘陵が内橋遺跡群であり、出港前に馬匹を集積しておく絶好の環境にある。倭政権が半島へ馬匹供与を行う津の一つが多々良込田遺跡で、その際に内橋遺跡群の渡来系集団が馬匹管理に従事したと考えられる。馬骨が集中するのは、食材加工に伴う物資運搬のほかに、このような馬匹管理が行われていたからであろう。その背景には、ミヤケに伴う交通経路が関わっていたと推測している。

4. 博多湾へ馬を運ぶ

(1) 糟屋屯倉に至る経路

阿恵官衙遺跡の調査で古代道路を検出した際、北部九州のミヤケを連絡する経路が継承され、それを整備したものが阿恵官衙遺跡の古代道路ではないかと検討したことがある（西垣2018）。ミヤケを連絡する経路とは、豊前の瀬戸内沿岸に分布する膝碕屯倉、肝等屯倉、桑原屯倉などから内陸の我鹿屯倉、嘉麻屯倉、穂波屯倉を経て那津官家に至る経路で、このうち宇美八幡宮付近で分岐して粕屋平野に向かう先のどこかに糟屋屯倉が位置すると想定した。この糟屋屯倉に至る経路が8世紀の古代道路に継承されて阿恵官衙遺跡と鶴見塚古墳の間を通過すると仮定したのである。古代道路は阿恵官衙遺跡付近で西海道駅路と接続するところまでしか確認できていないが、そのまま北西に延伸すると内橋遺跡群に到達する（図3）。

(2) 三国丘陵から博多湾へ

馬匹の有力な供給元は、筑紫平野北部に位置する三国丘陵である（図2）。三国丘陵では、6世紀から7世紀前半にかけて三沢古墳群を中心に馬を埋葬した土壙墓が検出されている。周辺古墳の出土例も加えると馬の埋葬は30例ほどが確認されていて、その数は東日本の大規模馬匹生産地である長野県伊那谷の飯田古墳群に匹敵するという（宮田2020）。古代の牧の比定地として記録はないが、1㎞×2㎞の遺構空白地を牧の推定地とし、馬の飼育または九州各地の牧から運ばれた馬を管理したとされる（宮田2020・2024）。

三国丘陵から博多湾へ馬匹を供給する経路としては、大野城東山麓の只越を抜けて粕屋平野に入る経路

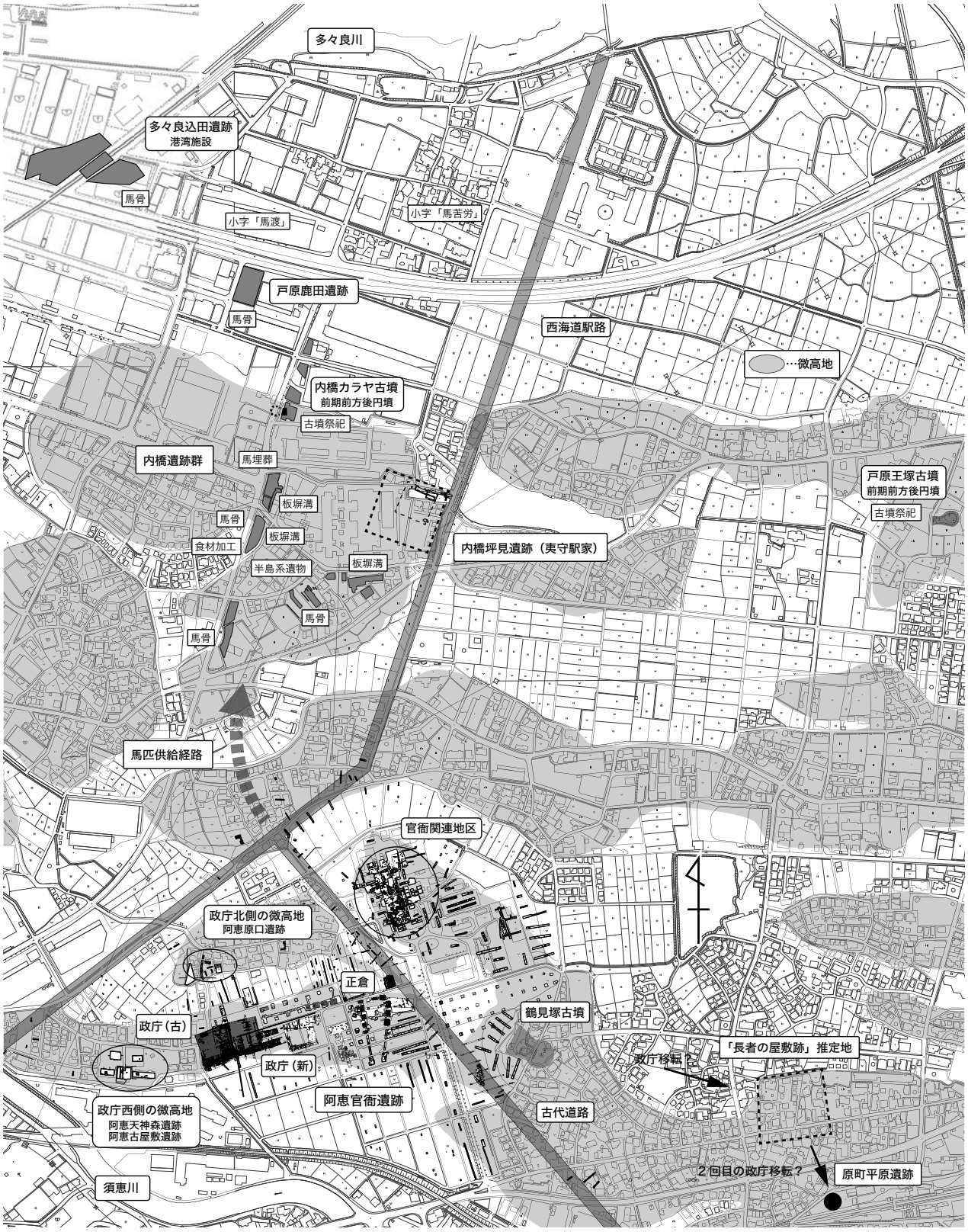


図３　阿恵官衙遺跡周辺の関連遺跡（1/10,000）西垣 2024b

（図2「馬匹経路①」）、二日市地峡帯を通過して福岡平野に入り那津官家を経由して博多湾に至る経路（同「馬匹経路②」）、「馬匹経路②」から分岐して唐山峠を抜ける経路（同「馬匹経路③」）を想定している。

只越は粕屋平野と大宰府をつなぐ峠道で、阿恵官衙遺跡の古代道路を南東に伸ばした先の一つが只越につながると推測している（西垣2018）。この経路が６世紀から７世紀の馬匹供給にあたっても利用されたと考えるもので、三国丘陵と只越をつなぐ具体的な経路の検証を要するが一考の価値はあるだろう。

一方、那津官家を経由して博多湾に向かう経路上の大野城市仲島遺跡では、大溝から馬骨が集中して出土している。全身が残るものはないが、その数は20体以上で、「馬匹の集積地あるいは馬匹管理・運搬に関わる集団の可能性」が指摘されている（上田2013）。内橋遺跡群の状況と類似しており、福岡平野側の馬匹管理を示す資料である。「馬匹経路②」に関わった馬飼集団が付近に存在する可能性が高い。

そして「馬匹経路②」は途中で唐山峠を抜ける「馬匹経路③」に分岐する。この峠道は、瀬戸内から那津官家を結ぶ経路そのものであり、粕屋平野側で只越の「馬匹経路①」と合流する。この衢（ちまた）から博多湾に伸びるのが糟屋屯倉に至る経路である（同「馬匹経路①＋③」）。古墳時代後期は古墳の築造場所がそれ以前と異なり、この経路に沿うように丘陵・山地斜面に集中する（図2）。次に特徴的な古墳を整理する。

正籠古墳３号墳（６世紀前半、前方後円墳、推定全長33m）は多量の馬具が副葬され、墳丘と墓道で破砕された同一個体の栄山江流域の陶質土器の甕が見つかっている。葬送儀礼に半島系遺物が用いられ、造墓行為に渡来系集団が関わっていたとみられる。

湯湧古墳1号墳（６世紀末、円墳・径16m）は単鳳環頭大刀が副葬されている。これは倭で製作された同型同范品が複数あるもので、製作工房を管理した中央豪族との結びつきを示す大刀と評価される（大谷2021）。糟屋屯倉を介して倭政権の政策に何らかの関わりがあり授受した被葬者と思われる。

観音浦古墳群（６世紀後半～７世紀後半）の岩永浦１号墳（７世紀第２四半期、円墳・径15m）は、多くの馬具とともに飛燕式鉄鏃と騎馬人物線刻須恵器が出土している。初期の飛燕式鉄鏃は八女地域に集中することから当初の所有氏族の主体は筑紫君と考えられ、磐井の乱後の朝鮮半島における軍事活動に筑紫国造が徴発されていることを踏まえて、筑紫国造の軍事動員に応じた豪族たちに飛燕式鉄鏃が共有されたという（小嶋2021）。この解釈の範疇でいえば、蛇行状鉄器とともに須恵器に描かれた騎馬人物像は武人としての被葬者の性格をよく表すとともに、三国丘陵の馬飼集団と協力して[2] 博多湾へ馬匹を搬出する馬匹供給経路に深く関わっていた可能性を想起させる。

「馬匹経路①＋③」の経路途中に位置する須恵町乙植木４号墳（６世紀末～７世紀初、円墳･径15m）は、出土遺物に金銅張金具、滑石製紡錘車、馬鈴３点がある。馬鈴は馬匹供給経路に関連するものだろう。

この衢付近に古墳時代後期の古墳が集中するのは、ミヤケの連絡経路、馬匹供給経路の成立に呼応し、物資や人員の流れに係る豪族間の協力体制や倭政権の政策、ミヤケの経営活動などに各集団が関わったことを示していると考える。その結果が単鳳環頭大刀、飛燕式鉄鏃、馬鈴の授受等に表れているのだろう。

5. 糟屋屯倉の入植者と古墳祭祀

糟屋屯倉に関連する内橋遺跡群と戸原寺田遺跡はいずれも渡来系集団を擁し、糟屋屯倉に深く関わった遺跡と考えられる。そこには地域と無縁な入植者たちがいて、入植時に古墳祭祀を行った可能性がある。

内橋遺跡群内に位置する内橋カラヤ古墳（図3）は、前方部のみ検出された前期前方後円墳である。周溝がある程度埋まった６世紀後半に、周溝の横３ｍの至近距離に竪穴建物がつくられる。馬匹管理を行った集団によるとみられる。周溝内でまとまって出土した須恵器蓋杯は口縁部が打ち欠かれ、その破片の一つが隣接する竪穴建物から出土し、周溝出土の杯蓋と接合した。周溝の祭祀で打ち欠いた破片を竪穴建物に持ち込んでいたとみられる。

戸原寺田遺跡の西方400mに位置する戸原王塚古墳（図3）も前期前方後円墳である。こちらも周溝がある程度埋まった６世紀中頃に、周溝から須恵器蓋杯がまとまって出土した。内橋カラヤ古墳と同じように口縁部は打ち欠かれている。戸原寺田遺跡の集団による行為だろう。

周溝出土土器が示す時期は、いずれの場合も各遺跡の入植時期と同じである。「地域外の集団がこの地に進出するに当たり、地域との新たな地縁関係を結ぶための儀式として歴代の首長墓で祭祀を執り行った」

（福島2017）可能性が考えられる。

6．糟屋評衙阿恵官衙遺跡　ー糟屋屯倉の後継ー

（1）阿恵官衙遺跡の概要

写真４　阿恵官衙遺跡政庁

国指定時の説明文を以下に記す。「粕屋平野の中央部、須恵川下流の標高６～８ｍの微高地上に立地する古代糟屋評（郡）の役所跡。糟屋評は698年に製作された国宝妙心寺梵鐘（京都府）の銘に「糟屋評造春米連廣國」とあることから、７世紀末の評造の名が分かる数少ない例としても注目される。また、遺跡の北方を北東から南西方向に向けて西海道駅路が通過する交通の要衝にもあたる。九州大学附属原町農場の移転に伴う発掘調査で、敷地の中央部を東西に延びる幅約100ｍの微高地上に、評（郡）衙の政庁跡、正倉群、西海道駅路から分岐する古代道路跡などを検出した。７世紀後半に成立した政庁は２度の改変を経て８世紀中頃に廃絶するが、正倉群は７世紀後半から順次、建てられ、政庁が廃絶する８世紀中頃から後半にも建物主軸方位を正方位とする正倉が建築されることなどが明らかになった。政庁、正倉といった官衙を構成する施設が良好な状態で検出されるとともに、西海道駅路等の道路網との関係など官衙の立地環境が判明した。また、成立は評の段階まで遡り、８世紀後半までその変遷をたどることができるなど、地方官衙の立地や成立時期、変遷を考える上で重要である」（文化庁2019）。上記に加え、古代道路を挟んで正倉群の向かい側に位置する微高地上に、政庁･正倉域の遺構変遷と連動する大型竪穴建物［41.5㎡］（図4左上）と官衙建物９棟が確認され、令和６年10月11日に追加指定された。

（2）糟屋屯倉と糟屋評衙をつなぐ大型竪穴建物

阿恵官衙遺跡の大型竪穴建物は、糟屋評衙の政庁が成立する前の７世紀第３四半期に単独で突如出現する。７世紀における福岡県内の竪穴建物は、集落遺跡でみると面積が20㎡未満のものが主体を占める（西垣2024ａ）。官衙関連遺跡においても20㎡を越えるものは少なく、大型の竪穴建物は、御原評衙に比定される上岩田遺跡の首長居宅域［94.1㎡、40.8㎡］、桑原屯倉関連施設の可能性がある下唐原伊柳遺跡（推定72.2㎡）、「北部九州（筑紫）における陸上交通のネットワーク機能を伴う首長層の拠点」と評価される黒田畑堀遺跡［41.3㎡・推定51.3㎡］などの竪穴建物がある（長2024）。つまり、糟屋評衙に隣接する場所で、政庁が成立する前に、県内最大級規模で首長居宅相当の竪穴建物が単独で突如出現していることがわかる。

ここで、戸原地区（戸原寺田遺跡とその関連遺跡を含む）と内橋遺跡群の消長を整理しておく。戸原地区は５世紀代から遺物がみられるが、６世紀中頃に遺物・遺構ともに急増し、渡来系技術による各種手工業生産を背景に、埠頭遺構と多数の倉を備えて物資の搬入・搬出・収容を行った博多湾を代表する拠点的集落で、鶴見塚古墳を支えた集団と推測する。７世紀第２四半期までで集落は終焉する。

内橋遺跡群は６世紀後半に出現し、７世紀前半に遺物・遺構の盛期を迎えるが、建物は少なく、居住域ではない。渡来系集団による漁労活動、食材加工、馬匹管理など糟屋屯倉を介した軍事的政策に伴う活動が行われたエリアと位置付けられる。ただしこれらの活動は、食材加工に利用された洗い場の井戸が７世紀第２四半期までで埋没するのを最後に終焉する。

戸原地区と内橋遺跡群は糟屋屯倉設置以後に入植して成立した可能性が高く、７世紀第２四半期と第３四半期の間に集落消長の画期が認められることは大化改新と親和性があり、糟屋屯倉関連遺跡の終焉を理解しやすい。一方、阿恵官衙遺跡の遺構変遷では、大型竪穴建物が７世紀第３四半期に出現するのが

確実な初源である。長舎囲いの政庁が成立するのは７世紀第３四半期～第４四半期で、大型竪穴建物より後出するとみられる。評衙の成立を、儀礼空間を備えた政庁の出現に求めるとするなら、遺構としての糟屋評衙の成立は孝徳朝の「天下立評」に遡る状況にはない。つまり、糟屋屯倉と糟屋評衙は考古学的には連続していない。

ただし、糟屋屯倉と糟屋評衙をつなぐ時期の遺構として、７世紀第３四半期に出現していた大型竪穴建物の存在は重要である。鶴見塚古墳と同じ丘陵上の遺跡空白地に北部九州最大級規模の竪穴建物が突如出現する状況は、その背景に政治的判断を考えるのが適切で、後に糟屋評衙の造営を行うであろう人物または集団とみなせることから[3]、大型竪穴建物の出現が評制に関する何らかの政策に基づいている可能性があると考える。そして、その解釈が正しいのであれば、①屯倉関連遺跡の終焉、②大型竪穴建物の出現、③評衙の成立、という流れは考古学的手法で認識できる評衙の成立過程の一側面と整理することができよう。その成立過程の解明のためには、評衙成立の定義のほか、屯倉関連遺跡の検証、該当地域における大型竪穴建物の出現背景など、課題は多い。特に、糟屋地域は百済の役とその後の大規模土木工事に係る人員動員の影響を直接的に受ける地域であり、そのなかで「②大型竪穴建物の出現」をどのように解釈するか検討を深める必要がある。「③評衙の成立」については、糟屋評衙に政庁が成立している頃は、糟屋地域の群集墳が築造を停止する時期であり（西垣2023）、一連の背景に庚午年籍、部曲の廃止など、族制的支配体系からの転換が進められたことと整合性があるように思えるところではあるが、全国的な評衙遺跡との比較検討が不可欠であり、今後の課題としたい。

※本稿は、西垣2024ｂを再構成し、一部修正を加えたものである。

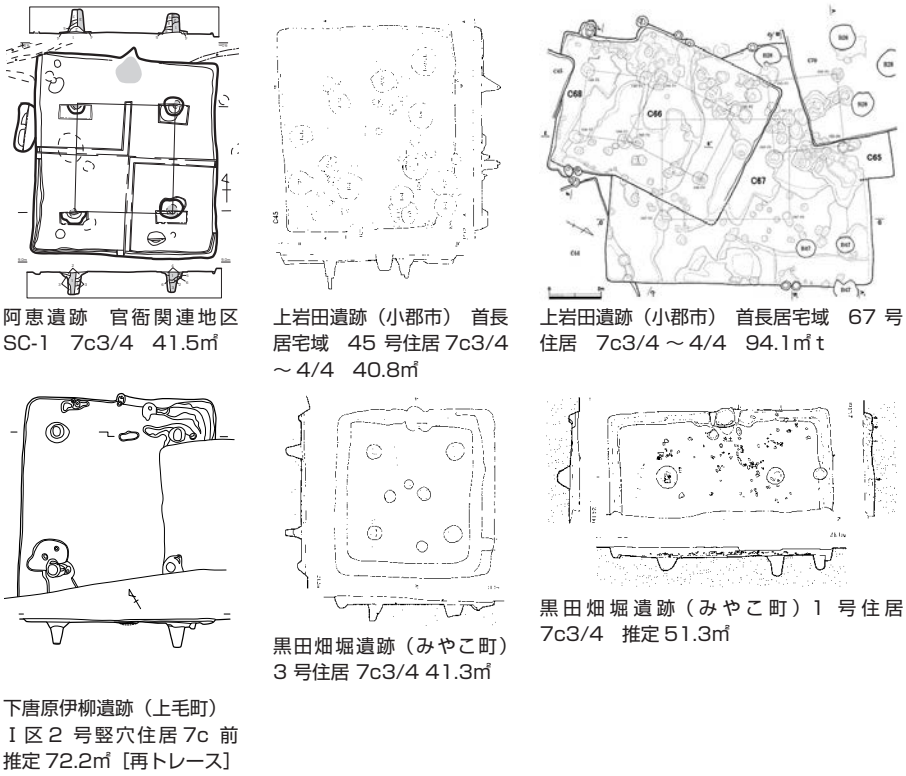


図４　北部九州の７世紀の大型竪穴建物（1/300）　長 2024 を元に作成

註

1）本稿で用いる「糟屋地域」の範囲は、北を立花山丘陵部、東を三郡山系、南を四王寺丘陵部に囲まれた範囲とし、現在の糟屋郡域とは異なる。

2）三国丘陵でも飛燕式鉄鏃が集中し、三沢古墳群で4点、横隈北田遺跡で1点出土している。

3）大型竪穴建物の後に政庁・正倉域と連動する官衙建物が造営されることから判断できる。

参考文献

上田龍児2013「御笠川流域の古墳時代―集落・古墳の動態からみた画期とその背景―」『福岡大学考古学論集』2　福岡大学考古学研

究室
大谷晃二2021「金銀装大刀と豪族」『大宰府史跡指定100年と 研究の歩み』九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集 第2集 九州国立博物館・福岡県立アジア文化交流センター
小鹿野亮・川口陽子2021『前畑遺跡　重要遺跡確認調査』筑紫野市文化財調査報告書第122集　筑紫野市教育委員会
河野保博2022「古代北部九州における馬匹生産の展開と鞠智城」『鞠智城と古代社会』第10号　熊本県教育委員会
小嶋篤2021「火国の領域設定と鞠智城」『鞠智城と古代社会』第9号　熊本県教育委員会
小嶋篤2024「筑紫君と「鞍轡尽しの坂」」『九州歴史資料館研究論集』49　九州歴史資料館
坂上康俊2018「阿恵遺跡と糟屋評」『阿恵遺跡』粕屋町文化財調査報告書第43集　粕屋町教育委員会
長直信2024「豊前地域における拠点集落の一様相―黒田畑堀遺跡２区における厩舎遺構の発見とその意義―」『九州前方後円墳研究会論集―九州前方後円墳研究会25回大会記念・柳澤一男さん喜寿記念・宇野愼敏さん古希記念―』九州前方後円墳研究会
西垣彰博2018「阿恵遺跡の成立背景」『阿恵遺跡』粕屋町文化財調査報告書第43集　粕屋町教育委員会
西垣彰博2023「糟屋地域における7世紀の集落と古墳の動態について」『集落と古墳の動態Ⅳ―飛鳥時代―』第24回九州前方後円墳研究会大分大会発表資料集（第2分冊）九州前方後円墳研究会
西垣彰博2024ａ「総括」『阿恵遺跡２次―官衙関連地区の調査―』粕屋町文化財調査報告書第63集　粕屋町教育委員会
西垣彰博2024ｂ「糟屋屯倉と評衙」『律令国家成立期の地域変動Ⅰ－筑紫から大宰府へ－』研究報告資料　古代官衙・集落研究会特別研究集会　奈良文化財研究所
福島日出海2017「おわりに」『内橋鏡遺跡2次調査・内橋カラヤ遺跡』粕屋町文化財調査報告書第40集　粕屋町教育委員会
宮田浩之2020「筑紫平野北部の古墳と馬飼い」『遺跡学研究の地平―吉留秀敏氏追悼論文集―』吉留秀敏氏追悼論文集刊行会
宮田浩之2024「筑紫平野北部の三国丘陵上の古墳と集落と馬飼い（予察）」『九州前方後円墳研究会論集―九州前方後円墳研究会25回大会記念・柳澤一男さん喜寿記念・宇野愼敏さん古希記念―』九州前方後円墳研究会
桃﨑祐輔2012「牧の考古学―古墳時代牧と牛馬飼育集団の集落・墓―」『日韓集落の研究―弥生・古墳時代および無文土器～三国時代―（最終報告書）』日韓集落研究会
桃﨑祐輔2019「北部九州の屯倉設置と首長権の消長」『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター研究論集第22集
吉川耕太郎2006『縄手下遺跡』秋田県文化財報告書第410集　秋田県教育委員会

発表３

ミヤケをつなぐ道

小嶋　篤（九州歴史資料館）

はじめに

夏五月辛丑朔、詔曰「食者天下之本也。黄金萬貫、不可療飢、白玉千箱、何能救冷。夫筑紫國者、遐邇之所朝屆、去來之所關門、是以、海表之國、候海水以來賓、望天雲而奉貢。自胎中之帝洎于朕身、收藏穀稼、蓄積儲粮、遙設凶年、厚饗良客。安國之方、更無過此。故、朕遣阿蘇仍君、加運河內國茨田郡屯倉之穀。蘇我大臣稻目宿禰、宜遣尾張連、運尾張國屯倉之穀。物部大連麁鹿火、宜遣新家連、運新家屯倉之穀。阿倍臣、宜遣伊賀臣、運伊賀國屯倉之穀。修造官家那津之口。又其筑紫肥豐三國屯倉、散在懸隔、運輸遙阻。儻如須要、難以備卒。亦宜課諸郡分移聚建那津之口、以備非常、永爲民命。早下郡縣、令知朕心。」

【『日本書紀』巻第十八 宣化天皇元年】

『日本書紀』「那津官家」設置記事は、記載内容が豊富であり、ミヤケ研究の重要な研究素材となっている。以下に核となる情報を列挙する。

①倭政権（大王）の指示により、「非常に備えて民の命を守るために」那津に官家を設置。

②「筑紫肥豊三國屯倉」は分散し、それぞれが「穀」を保管。

③各屯倉を分け移して、那津官家へ輸送・備蓄。

今日知られているように『日本書紀』には、虚実入り乱れた内容が記載されており、その内容には多角的検証が必要である。本報告では、考古資料を基に史料記載の「ミヤケ」の実態を整理した後、「ミヤケをつなぐ道」について検討する。

１.「那津官家」の遺跡と存続時期

『日本書紀』の記述から、「那津官家」には各屯倉から搬入した穀物を保管する倉庫群が設置されていたことが想定できる。本想定と那津（博多湾）という所在地を根拠に、那津官家跡に比定されているのが福岡市にある比恵・那珂遺跡群である。同遺跡群の面的様相が分かる比恵8・72次調査区と比恵125次調査区では、三本柱一対の囲郭内に並び立つ総柱建物群が検出された。出土土器から建物群は6世紀後半（小田編年ⅢＡ期新相）を上限とし、7世紀第3四半期（小田編年Ⅴ期）を下限として機能したと把握されている（図1）。久住猛雄氏の精査により、「区画溝を切る溝には、図示されていないが6世紀第4四半期後半の土器も流入し、かつ各溝下層には7世紀第4四半期の土器が出土する」と絞り込まれており、倉庫群下限の有力根拠が積み上げられている（久住2023）。本時期比定に基づくと、百済救援戦争・築城期古代山城と倉庫群には併存時期が存在すると把握できる。

倉庫群の設置は6世紀後半を上限とするため、『日本書紀』宣化天皇元年（536年）の官家設置時期よりも後出する。本時間差を解消する仮説として、酒井芳司氏は「筑紫・肥・豊三国の屯倉と那津官家修造記事の年紀は信頼できない」とし、瀬戸内海沿岸・九州北部の屯倉設置時期、国際環境の状況から、那津官家設置は6世紀後半と把握する（酒井2024）。

倉庫群とともに「筑紫肥豊三国屯倉からの穀搬入」を実証するものに、古墳時代後期とされる牛の歩行痕跡（比恵112次）や、壺・甕類に見られる搬入土器が挙げられる。搬入土器の調査研究により、今後より着実な検証が可能となることが期待できる。

また、「遐邇之所朝届、去来之所関門」と対応する遺物として、日本列島でも最古相の瓦類がある。那

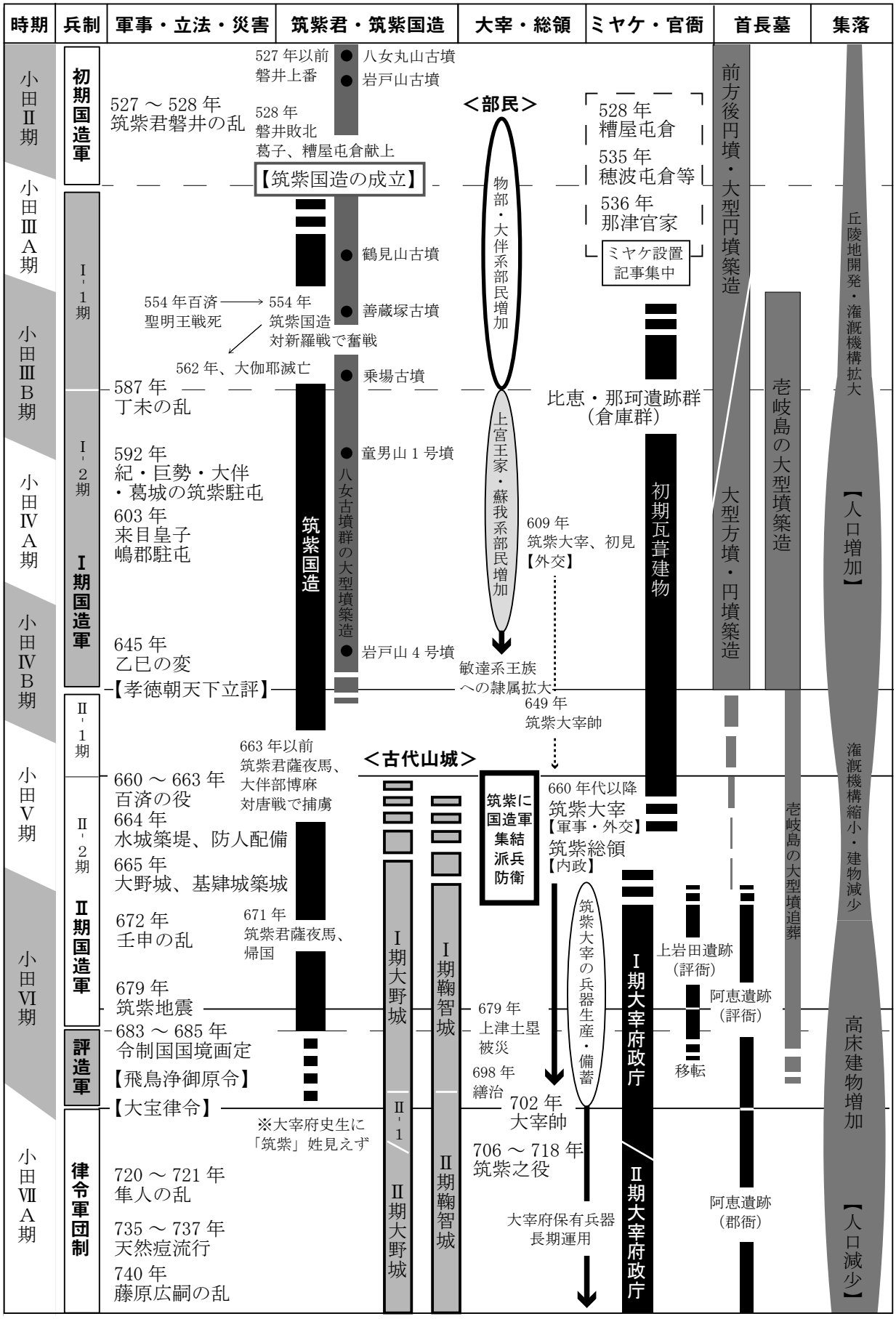


図１　筑紫君と筑紫洲の動態

珂遺跡23次調査区では、九州最古相の瓦類（神ノ前タイプ・月ノ浦タイプ）が複数出土しており、方形区画（約115m×約90m）内等に瓦葺建物が存在したと見られる。用いられた瓦は瓦当文様・製作技法ともに多様であり、斉一性とは程遠い製品である。須恵器製作技術が応用されており、瓦・瓦葺建物の認知が乏しい須恵器工人が受注生産したものと考えられている。

2．ミヤケと道の考古学

（1）ミヤケの直接的証拠を探る

比恵・那珂遺跡群の様相から、「官家」が①特殊な囲郭と倉庫群、②瓦葺建物をもち、物資搬入痕跡として③牛の歩行痕跡、④搬入土器が見られることが明らかになってきた。一方で、倭国各地に分散する「屯倉」については、直接的証拠を特定しきれていない現状がある。本課題を「屯倉」の整理統合により成立したとされる「評」から逆算的に考える。現在、評の中枢施設である「評衙」については、計画的な建物配置をもつ掘立柱建物群で構成されていることが明らかとなっており、その上限年代は筑紫の阿恵官衙遺跡・上岩田遺跡、関東の橘樹官衙遺跡群等から7世紀後半と把握できる。つまり、屯倉から評に転換する「孝徳朝の天下立評（649年頃）」と評衙成立には時間差が存在することは確実視できる。本現象を根拠に天下立評そのものを否定する考えもあるが、評・屯倉が「人」を対象とした集団編成に根幹をもち、「施設自体は付加的存在」・「統治機構（評）の発展を経た施設整備」と捉える考えも成立し得る（仁藤2012）。天下立評の痕跡として挙げられるのは、7世紀第2四半期の大型墳築造抑止という現象であり、各豪族による私的な大規模動員抑止が試みられたと考える。本抑止策は、戸籍による「個人の国家管理」に先行する「集団の国家管理」と見なせる。いずれにせよ、評・屯倉が「人」の管理を根幹とした場合、その施設は豪族居館や集落内倉庫を利用する構造も成立し得るため、直接的証拠の提示にはさらなる研究蓄積が必要となる。少なくとも、評衙建物を検出した地点には、ミヤケと認定し得る遺構が存在しないため、評衙建物はミヤケ建物からの単系列的発展で成立していないことは確定である。その反面、評衙と郡衙については直接的に連続する施設として評価できる。

（2）ミヤケの間接的証拠を探る

次にミヤケの存在を示す間接的証拠（状況証拠）を取り上げる。文献史料と考古資料の双方で実在が認められる「那津官家」では、物資搬入・蓄積を肯定してよい。つまり、『日本書紀』に記載される「筑紫肥豊三国屯倉からの穀搬入」は信憑性が高く、那津官家に先行して「筑紫肥豊三国屯倉」が存在したことが間接的に認められる。那津官家を起点にすると、「筑紫肥豊三国屯倉」の設置時期は、那津官家に先行することから6世紀第3四半期（小田編年ⅢA期新相）以前と類推できる。

那津官家が設置された福岡平野周辺は前方後円墳築造数が多いものの、墓域が分散し、かつ古墳規模自体も八女古墳群や津屋崎古墳群に比して小型である。本状況から同地の首長権は分散傾向にあり、同一地域に氏族を違える複数集団が同居したことがうかがえる。例えば、筑紫君葛子による糟屋屯倉献上を肯定した場合、同地に筑紫君に従属する集団が居住していたと把握できる。また、文献史料と考古資料の双方で、局所的に宗像部も存在したことが認められる。加えて、中央豪族に帰属する集団として、牛頸窯跡出土刻書土器から三輪部、妙心寺鐘から舂米部の存在も認められる。以上をふまえると、多くの潜在的利権を有する那津周辺には、中央・地方を問わず非在地豪族に帰属する集団がモザイク状に分布していたことを念頭に置いた方がよい。

上記想定を裏付ける物証が同地の墓制であり、古墳時代後期の福岡平野周辺には系譜が異なる多様な横穴式石室墳・竪穴式石室墳・甕棺墓等が展開する（図2）。埴輪生産も同一首長系列では連続性をもつが、地域単位で見れば多系列構造をなす。本多様性は筑紫洲において他に類を見ず、那津のみが有する特異点である。その状況下で注目できるのが「鉄滓出土古墳の偏在」であり、製錬滓を供献する鉄滓供献習俗が

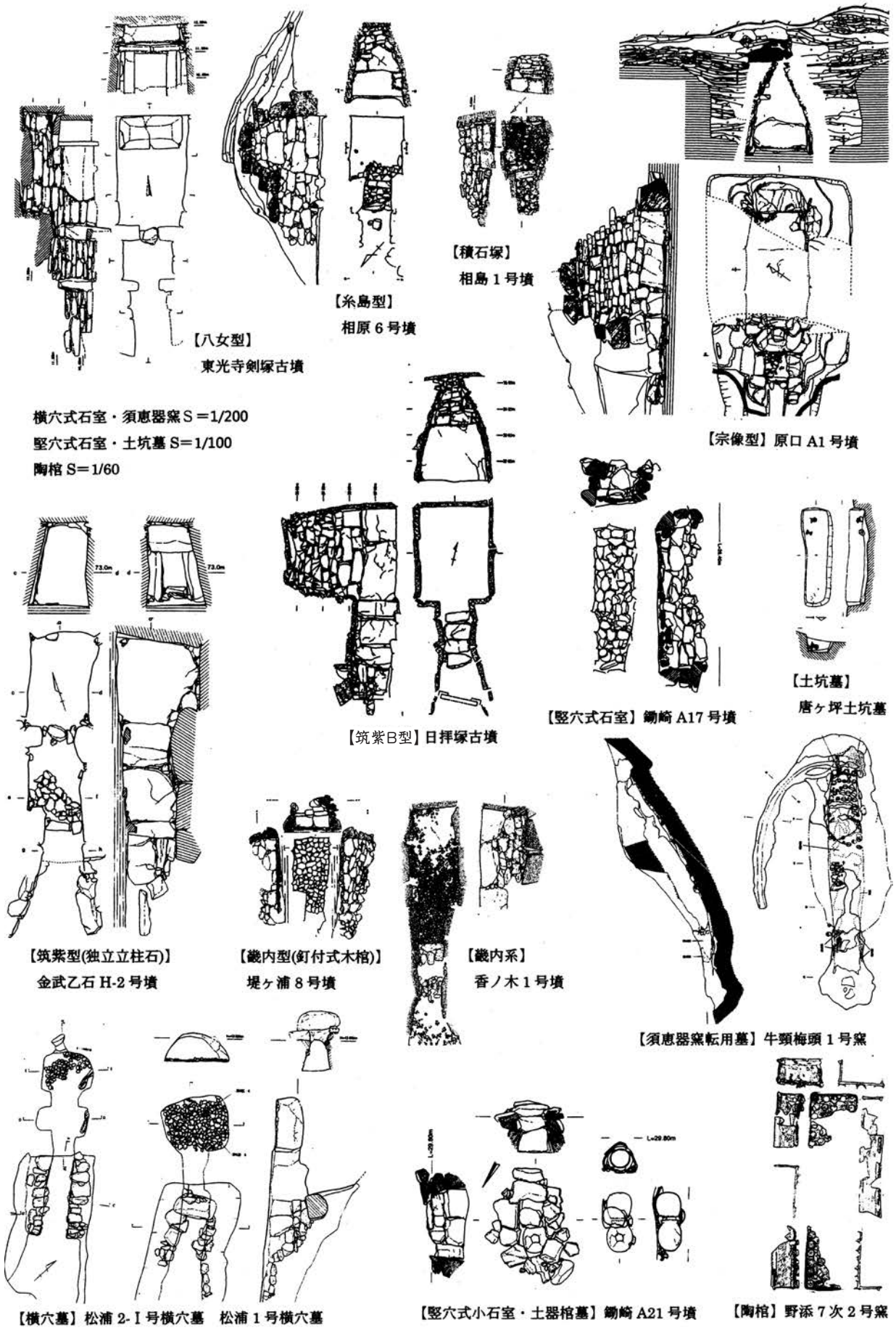


図２　福岡平野周辺における墓制の多様性

福岡平野西部・糸島半島東部に集中する。同習俗の広がりが福岡平野西部・糸島半島東部における鉄生産の協業的労働を媒介とすることをふまえると、燃料林利用において福岡平野東部の須恵器生産との広域的棲み分けを認めてよい（小嶋2010）。このような燃料林の広域的棲み分けは、亀田修一氏により白猪屯倉・児島屯倉比定地でも把握されており、ミヤケの存在を示す間接的証拠として注目できる（亀田2008）。

（3）ミヤケへの物資運搬路を探る

比恵遺跡における牛の歩行痕跡から、物資輸送には牛馬も用いられたことが見込まれる。ただし、歩行痕跡の検出例はわずかであり、物資運搬路の全体像を復元できるほどの資料蓄積はなし得ていない。また、古墳時代以前の道路は、側溝を具備するような斉一性・規格性をもつようなものではないことは明らかであり、集落間をつなぐような交通路、本研究が主題とするようなミヤケへの運搬路については、直接的証拠の提示が難しい状況が続いている。このため、本研究では①物資輸送（土器・埴輪・鉄製品等の分布）、②大型墳の築造地点、③社の所在地、④居住域の立地、⑤灌漑機構の整備状況といった間接的証拠から「ミヤケをつなぐ道」を検討し、筑紫洲の東西路となる「筑紫と豊をつなぐ道」と、南北路となる「筑紫と火をつなぐ道」での実践例を紹介する。

3．筑紫と豊をつなぐ道

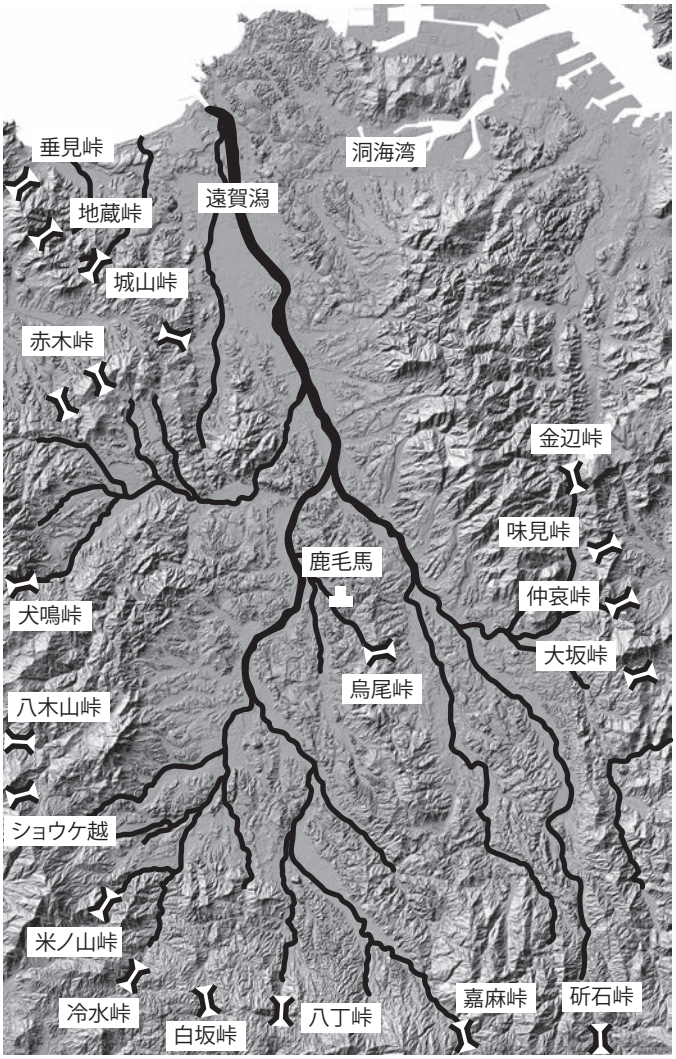
（1）遠賀川流域の歴史的環境と東西分割

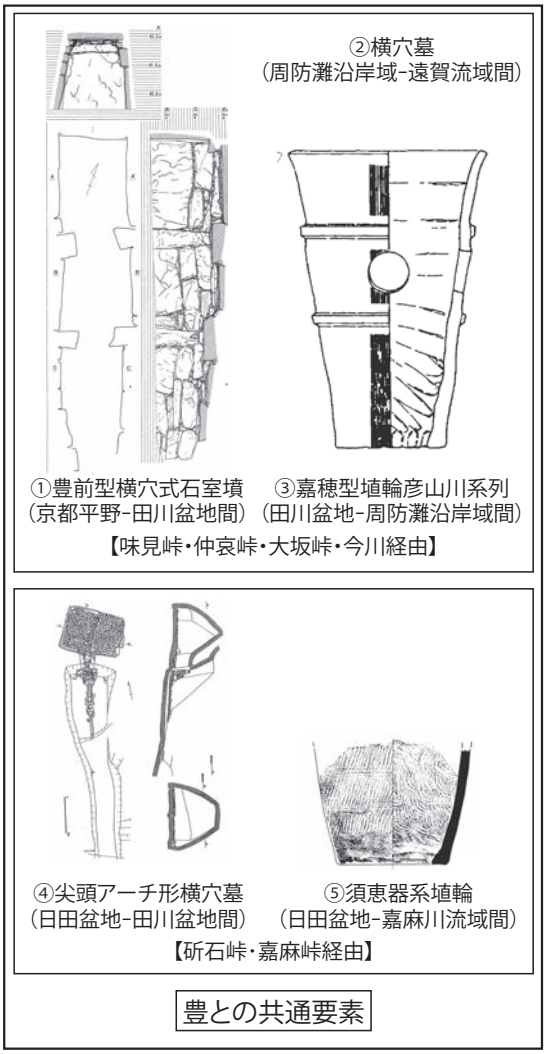
筑紫と豊の境界域を北流するのが遠賀川である。遠賀川は、三郡山地・福智山地・英彦山火山岩山地を水源とする大河川で、幹流に向けて枝状小河川が幾重にも流れ込んでいる。同流域は筑豊平野とも称されるが、谷地形と小盆地が連なった集合体という実態をもつ（図3）。この集合体を連結する道が、遠賀川そのものであったことは多言を要さない。また、水源となる三方の山地は、遠賀川流域と福岡平野・筑紫平野・京都平野を遮断する壁となっている。この壁を「越えてくる、越えていく」要素に着目することで、「筑紫と豊をつなぐ道」についての物的証拠を積み上げることができる。

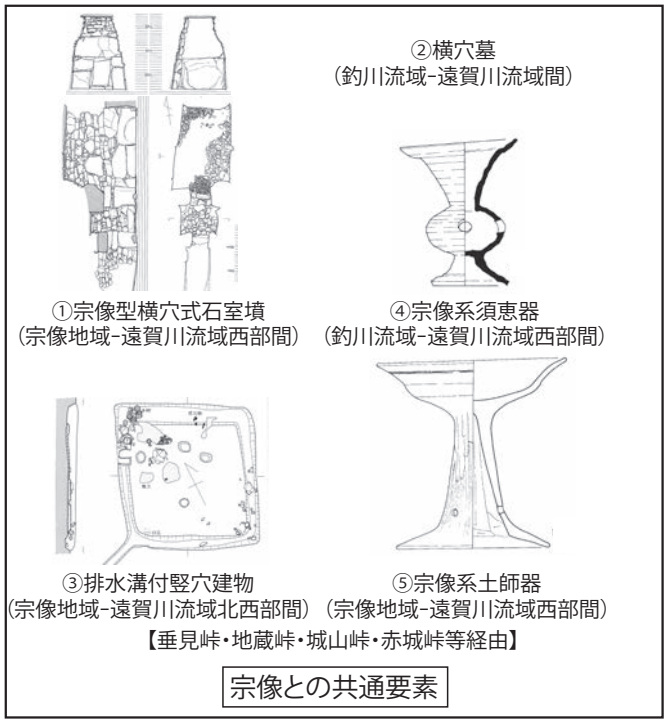
日本列島での律令国家形成過程では、地方豪族を評造・郡司（地方官）に編入する集団管理により領域的支配を進めた。このため、古墳時代に形成された地域秩序が、令制国に取り込まれる実態があり、筑紫では神郡として宗像神に奉じられた宗像郡（評）が典型例である。遠賀川流域では「豊前国田河郡」、「筑前国遠賀郡・鞍手郡・嘉麻郡・穂波郡」の計5郡が存在するが、同一流域でありながら、東西で豊前国・筑前国に分割されている。本分割要因も、古墳時代に形成された地域秩序と接続すると見られ、同秩序形成の前提条件となったものが「筑紫と豊をつなぐ道」である。

（2）遠賀川流域と宗像の関係

古墳時代を通じて、遠賀川流域と最も相互交流をなしたのが宗像地域である。内海となる遠賀潟は響灘・玄界灘沿岸航路の拠点として、宗像君一族も日常的に利用していたと考えられる。加えて、汐入川流域・西川流域・犬鳴川上流域は、谷筋や低い峠道を通じても宗像地域と接続していた。両地域で共通する要素には、①宗像型横穴式石室墳、②横穴墓、③排水溝付竪穴建物（重藤2020）、④宗像系須恵器（太田2020）、⑤宗像系土師器がある。④宗像系須恵器については、太田氏が「宗像回路」と称する宗像窯跡群と井手ヶ浦窯群との双方向での技術交流、宗像窯跡群から野間窯跡への技術提供を明らかにしており、単なる製品の供給関係ではない（太田2020）。また、⑤宗像系土師器ではとくに墳丘祭祀に用いる高坏を見ると、出土古墳毎の製品差が認められ、基本的に造墓集団単位で生産される状況にあり、やはり製品の流通に留まらない。上記の共通要素は、海路経由と陸路経由のものが混在するが、釣川上流域と犬鳴川上流域間のものは陸路経由を念頭に置いた方が自然である。これら宗像との共通要素は、基本的に彦山川流域を除く遠賀川流域西部に分布しており、とくに隣接地域で濃厚である。


垂見峠
地蔵峠
城山峠
赤木峠
遠賀潟
洞海湾
金辺峠
味見峠
鹿毛馬
仲哀峠
犬鳴峠
大坂峠
烏尾峠
八木山峠
ショウケ越
米ノ山峠
冷水峠
白坂峠
八丁峠
嘉麻峠
斫石峠


②横穴墓
（周防灘沿岸域-遠賀流域間）
①豊前型横穴式石室墳
（京都平野-田川盆地間）
③嘉穂型埴輪彦山川系列
（田川盆地-周防灘沿岸域間）
【味見峠・仲哀峠・大坂峠・今川経由】
④尖頭アーチ形横穴墓
（日田盆地-田川盆地間）
⑤須恵器系埴輪
（日田盆地-嘉麻川流域間）
【斫石峠・嘉麻峠経由】
豊との共通要素


②横穴墓
（釣川流域-遠賀川流域間）
①宗像型横穴式石室墳
（宗像地域-遠賀川流域西部間）
④宗像系須恵器
（釣川流域-遠賀川流域西部間）
③排水溝付竪穴建物
（宗像地域-遠賀川流域北西部間）
⑤宗像系土師器
（宗像地域-遠賀川流域西部間）
【垂見峠・地蔵峠・城山峠・赤城峠等経由】
宗像との共通要素

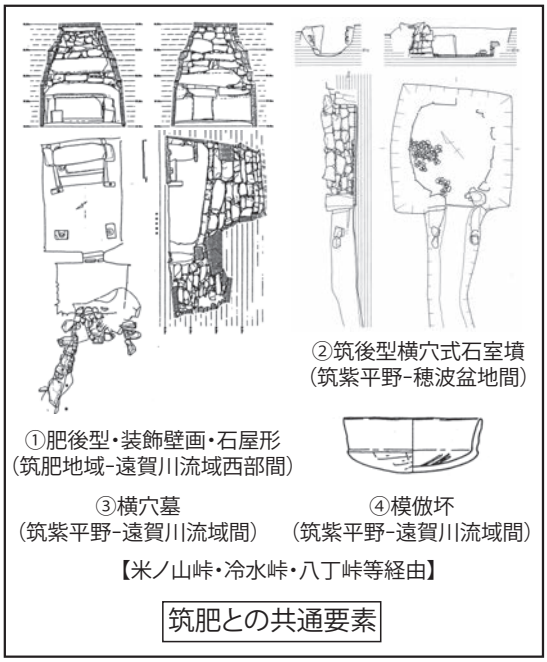

②筑後型横穴式石室墳
（筑紫平野-穂波盆地間）
①肥後型・装飾壁画・石屋形
（筑肥地域-遠賀川流域西部間）
③横穴墓
（筑紫平野-遠賀川流域間）
④模倣坏
（筑紫平野-遠賀川流域間）
【米ノ山峠・冷水峠・八丁峠等経由】
筑肥との共通要素

図 3　遠賀川流域の峠

（3）遠賀川流域と筑肥の関係

6世紀前半に、遠賀川流域と緊密な関係を有したのが筑肥地域（筑紫・肥後）である。筑肥地域とのつながりは、遠賀潟を接点として断続的に見られる（大城大塚古墳・目尾石棺等）が、穂波川上流域にも事例が集中する。①肥後型の用石･彩色壁画（柳澤2004）、②筑後型横穴式石室墳（八木2020）、④模倣坏（福本2007）は米ノ山峠や冷水峠を経由した共通要素と見てよい。また、③横穴墓も同峠等を経由した共通要素と判断できる。②筑後型横穴式石室墳は単発的な事例で、周辺への影響は認められない。④模倣坏は遠賀川流域で独自的に生産されており、長期的な双方向性はもたない。③横穴墓は「コの字形死床」という肥後由来の要素普及がある一方で、形態比較から遠賀川流域から筑後地域へ伝播したものも認められる。筑肥との共通要素は、典型例は局所的にしか見られないが、在来の古墳墓制や生活様式に組み込まれる形で遠賀川上流域を中心に全域に及んでいる。

（4）遠賀川流域と豊の関係

古墳時代後期から飛鳥時代にかけて、遠賀川上流域（彦山川･嘉麻川）は豊地域（周防灘沿岸域･日田盆地）との交流が認められる。遠賀川流域の古墳時代墓制の特色である①横穴墓は、大局的には周防灘沿岸域からの技術導入によりもたらされたものとなる。②嘉穂型埴輪彦山川系列は、京都平野での採用状況が不確定だが、国東半島付け根の猫石丸山古墳で飛び地的に共有されている。また、同埴輪を墳丘表飾とする狐塚1号墳の主体部は、③尖頭アーチ形横穴墓を内部主体とし、同一形態の横穴墓は日田盆地に認められる（田代2008）。嘉麻川流域の次郎太郎古墳群にのみ認められる④須恵器系埴輪も、日田盆地の首長墓・朝日天神山古墳と共通する要素となる。古墳時代後期後半～飛鳥時代にかけては、⑤豊前型横穴式石室墳が彦山川流域～周防灘沿岸域西部にかけて展開する（田村2009・小嶋2021b）。豊前型横穴式石室墳は、筑紫型横穴式石室墳を軸に畿内系要素を強めたものであり、畿内系石室がひろく分布する周防灘沿岸域東部と隣接する西部で成立する。九州における分布域は、後の豊前国北部の範囲とほぼ一致しており、遠賀川流域では田河郡域のみに集中する。

（5）遠賀川流域の十字路

遠賀川流域と宗像・筑肥・豊との共通要素の多くは、古墳築造に関わるものであり、とくに首長墓と称される大型古墳に伴う事例が目立つ。古墳時代後期は古墳墓制の集団差が顕著に高まる時代だが、一方で上位階層では、他集団で培われた技術を積極的に自らの古墳墓制に組み込む融合現象が多発する。本現象を引き起こす背景には、「新技術によって生み出された製作物の入手」と「他集団を古墳築造に参画させる体制」の二つの要素が複合している。古墳時代の他集団とは、他豪族の管轄下にある部民・私有民（部曲）が該当し、豪族間の合意がなければ、その動員は越権行為となる。つまり、豪族間では婚姻等の協力関係を媒体とし、相互に部民・私有民（部曲）を派遣・受容し合うことで、各々がより広範囲の集団を使役できる存在であることを、古墳築造を通じて誇示する実態がある。派遣された人員は、「個人」として参画するというよりも、古墳設計（墳丘・石室等）に携わる技術指導者として「組織」に迎えられており、実務レベルで造墓秩序を改変する直接要因となっている。

以上をふまえ、改めて遠賀川流域を取り囲む山々を「越えてくる、越えていく」要素に着目すると、遠賀川流域から放射状に伸びる峠道の重要性が見えてくる。峠道は各豪族が協力関係を築くほどの機能、すなわち物資運搬路として各生活圏を支える生活基盤であったと結論できる。

遠賀川流域の物資運搬路として、とくに注目できるのが周防灘沿岸域と玄界灘沿岸域をつなぐ東西路であり、後の「豊前国府－大宰府」をつないだ豊前路の原型が古墳時代後期には社会的価値を具備した状態で成立していたことを物語る。豊前路の原型となった東西路こそが、「ミヤケをつなぐ道」であり、同道沿いに比定されるのが「我鹿屯倉」･「嘉麻屯倉」･「穂波屯倉」である。また、遠賀川流域の物資運搬路として、大動脈となる遠賀川の存在も見過ごすことはできず、玄界灘航路と接続する南北路の機能を果たし

た。遠賀川中流域「目尾」の川床からは阿蘇溶結凝灰岩製石棺が引き上げられており、古墳時代後期においても高い物資運搬能力を有していたことを実証する。遠賀川自体も「ミヤケをつなぐ道」であったと評価できる。

４．筑紫と火をつなぐ道

（１）筑紫・火の境界と三国丘陵の歴史的環境

飛鳥時代における倭政権の観念領域は、筑紫の外縁地域をすべて火に収斂する構造をもつ。このため、筑紫と火の間には「①玄界灘沿岸域（糸島－唐津間）、②筑後川下流域（両筑平野西端－佐賀平野東端間）、③有明海沿岸域（みやま・大牟田－南関・荒尾間）」という三つの境界が存在することになった。これら三つの境界は、筑紫洲で培われてきた実態領域とも連続する。その最たる物証となるのが古墳時代後期における横穴式石室墳の分布状況（認識・技術共有状況）であり、各豪族による造墓動員範囲との相関関係が認められる。「境界①玄界灘沿岸域」は糸島型と筑紫型・松浦型の分布境界、「境界③有明海沿岸域」は、八女型・筑後型・筑紫型と肥後型の分布境界と対応する。

「境界②筑後川下流域」は境界①・③と異なり、筑後型と筑紫型が入れ子状の様相を呈し、同地北端に位置するのが三国丘陵である。この三国丘陵周辺を舞台とした筑紫国名由来説話が『筑後国風土記』逸文に記されている。

「筑後国の風土記に云はく、筑後国は、本、筑前国と合せて、一つの国たりき。昔、此の両の国の間の山に峻しく狭き坂ありて、往来の人、駕る所の鞍韉を摩り尽されき。土人、鞍韉尽しの坂と曰ひき。三に云はく、昔、此の堺の上に麁猛神あり、往来の人、半ば生き、半ば死にき。其数極く多なりき。因りて人の命尽の神と曰ひき。時に、筑紫君と肥君等之を占へて、筑紫君等の祖の甕依姫を祝と為して之を祭らしめき。爾より以降、路行くの人、神に害はれず。是を以ちて、筑紫の神と曰ふ。四に云はく、其の死にし者を葬らむ為に、此の山の木を伐りて、棺輿を造作りき。茲れに因りて山の木尽さむと欲す。因りて筑紫の国と曰ひき。後に、両の国に分ちて、前と後と為す。」（『釈日本紀』）

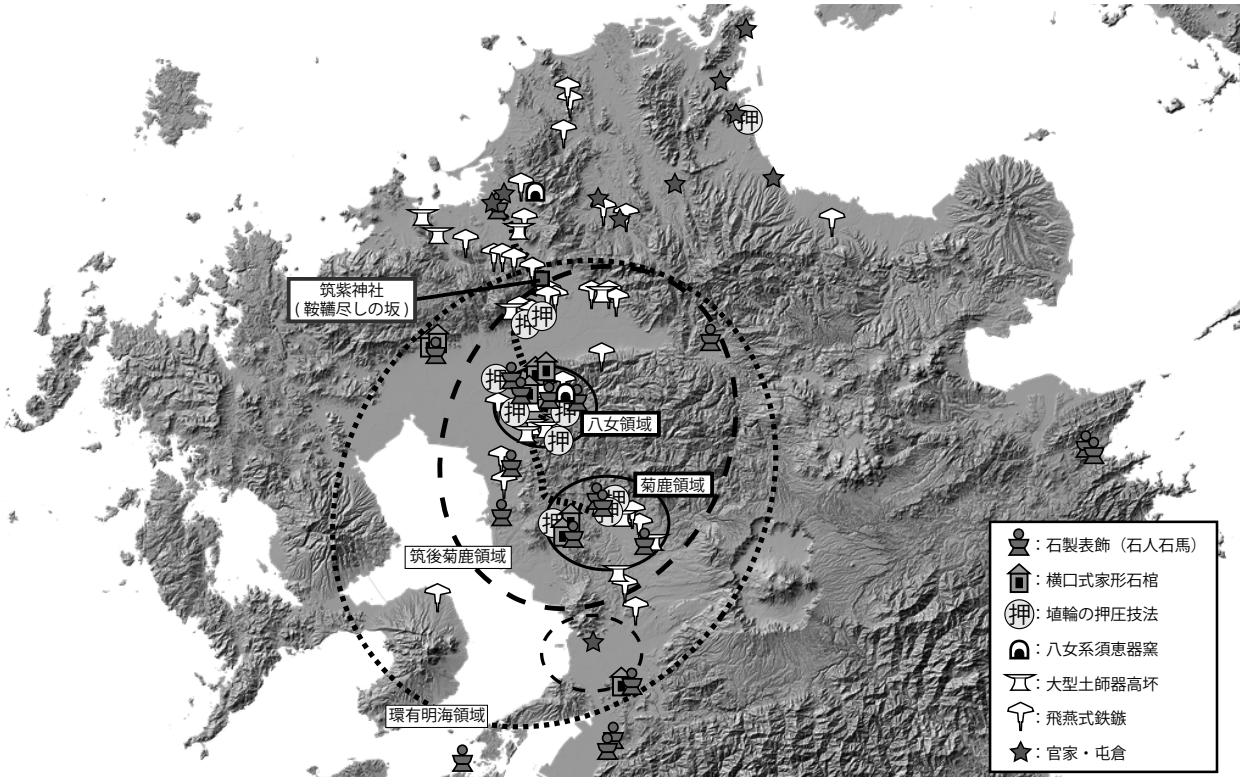
本説話で語られる「鞍韉尽しの坂」は、『筑後国風土記』編纂（和銅六年（713年）編纂開始）以前に存在した古道であり、かつ「筑紫」の国名起源にもなることから、筑紫洲の幹線路であったことが推測できる。加えて、同地に坐す麁猛神を奉斎したのが筑紫君・肥君（火君）等であり、有明海・八代海側を本拠地とする豪族等であることが注目できる。

（２）筑紫・火の結合と「鞍韉尽しの坂」

筑紫（八女地域）と火（菊鹿地域）における古墳築造技術の共有関係は、古墳時代中期（5世紀中頃）からはじまり、古墳時代後期を通じて持続する。本結合は一過性のものではなく、累代的に継続したと把握できる。その状況下で、筑紫と火で、それぞれ独自の造墓秩序を形成する点が重要で、両者が単一の集団ではなく、別個の集団として並立し続けたことを示している。

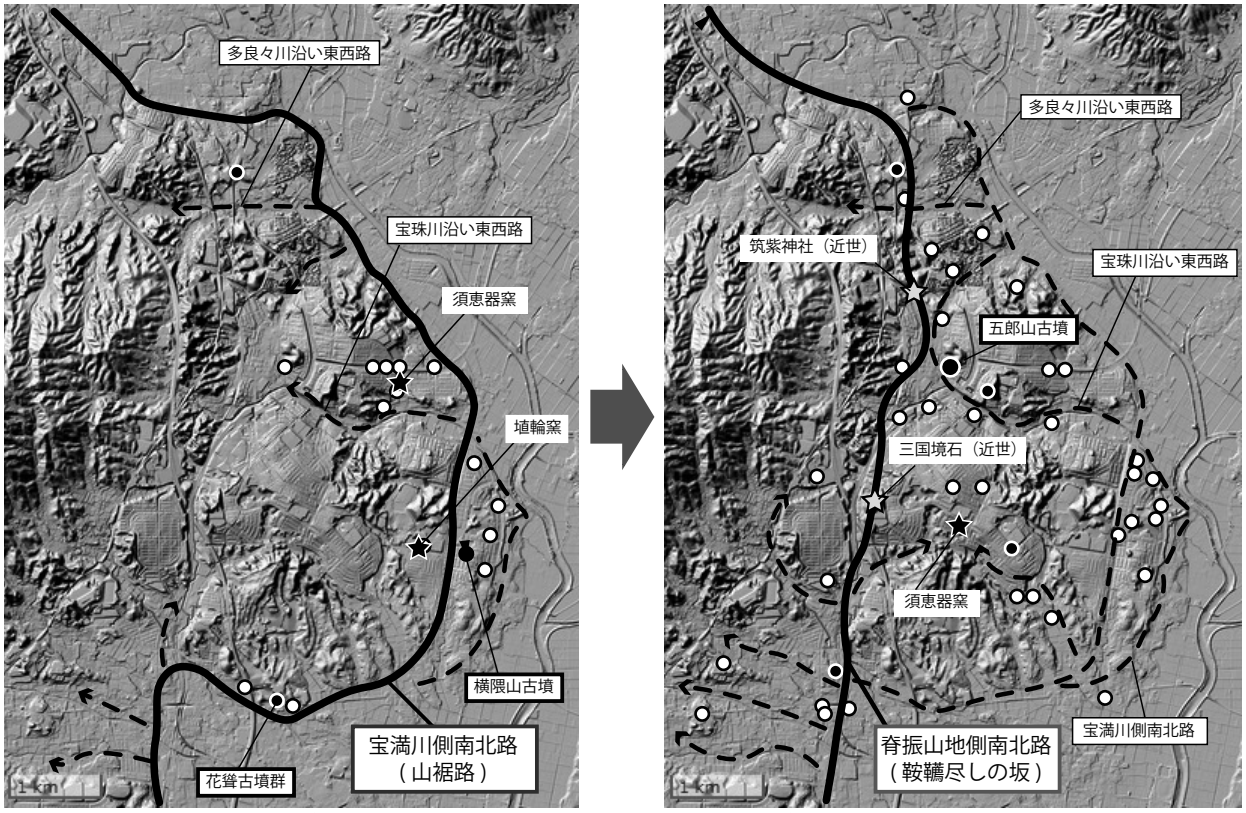
以上の考古学的事象とあわせて注目できるのが、文献史料にあらわれる筑紫火君の存在である。『日本書紀』には、筑紫火君は「筑紫君の子、火中君の弟」と記されており、両豪族が婚姻で結ばれていたことを物語る。この筑紫火君を郡領氏族としたのが肥前国養父郡であり、郡域最大の前方後円墳である庚申堂塚古墳･岡寺古墳の被葬者に、筑紫火君を比定することは一定の学術的根拠がある。とくに注目できるのが、両古墳に並べられた埴輪である。庚申堂塚古墳・岡寺古墳は、全体規格・ヘラ記号は野津古墳群で採用された肥後南部型埴輪の系統に連なり、製作技法には八女古墳群を中心に広がる押圧技法も具備する点が重要で、まさしく「筑紫」と「火」の二つの要素が混じった造形となる。

庚申堂塚古墳の築造時期は埋葬主体部（筑紫Ｂ型）と墳丘表飾（肥後南部系）から、六世紀前半（ＴＫ１０型式期古相）に位置づけられ、被葬者の生存期間は「筑紫君磐井」の生存期間と重複すると判断できる。



八女領域：筑紫君の主たる直接動員範囲
菊鹿領域：筑紫君と継続的に協力関係にある豪族の動員範囲 (間接動員範囲)
筑後菊鹿領域：筑紫君に同調した豪族が多かったと見られる範囲
環有明海領域：乱前より筑紫君と協力関係（有明首長連合）にあり、筑紫君に同調した豪族を含む範囲
筑紫・火・豊：「筑紫君磐井の乱」の最大参画範囲 (九州山地以北)

図 4　筑紫君の直接動員範囲と間接動員範囲



：前方後円墳　●：大型円墳　○：集落・墓域
＜古墳時代中期の推定交通路＞

●：大型円墳　○：集落・墓域　※国土地理院地図利用
＜古墳時代後期の推定交通路＞

図 5 「鞍轡尽しの坂」と三国丘陵周辺の遺跡動態

したがって、筑紫君磐井の乱以前に、筑紫君・火君が筑後川北岸域に進出していたと把握できる。

筑後川北岸域を郡域とする肥前国養父郡は、「鞍轡尽しの坂」南方に位置し、庚申堂塚古墳・岡寺古墳の北方約四㎞に「三国境」が存在する。三国丘陵周辺の遺跡動態から、脊振山地側南北路となる「鞍轡尽しの坂」の開通時期が古墳時代中期後半から後期前半（５世紀後半～６世紀中頃・ＴＫ４７～ＴＫ１０型式期）に絞り込める点をふまえると、庚申堂塚古墳・岡寺古墳の墓域設定も「鞍轡尽しの坂」を内包する筑紫と火をつなぐ道路（筑紫縦貫道）の整備とも接続すると評価できる（図５）。

（３）筑紫洲を往来する人馬

三国丘陵を縦走する脊振山地側南北路「鞍轡尽しの坂」の名は、鞍から馬体を保護する馬具「下鞍（したくら）」に由来する。本名称との重なりをもつ現象として、三国丘陵では古墳時代後期の群集墳において複数の殉葬馬が確認されており、同地では朝鮮半島有事に備えた軍用馬の集積や調教・管理がなされたと想定されている（宮田2020、桃﨑2012）。「鞍轡尽しの坂」と軍用馬の関わりでは、継体天皇二十一・二十二年に勃発した「筑紫君磐井の乱」も注目でき、最終戦場となる「御井」に至る緒戦は、「那津（糟屋屯倉）－三国丘陵（筑紫神社）－筑後川（渡河地点）」をつなぐ南北路沿いで展開したと見られる（図4）。とくに、筑紫君が主体的に奉斎した筑紫神坐す地・三国丘陵は、まさしく交通の要衝と呼ぶに相応しく、ヤマト・ツクシ双方の人馬が行き交ったことは想像に難くない。

ツクシ側軍用馬の一端を示す資料として、2024年に注目を集めたのが岩戸山古墳出土の「馬甲着装馬形埴輪」である（小嶋・酒井編2024、渡邉2024）。本馬形埴輪は『筑後国風土記』逸文における「筑紫君磐井之墓墳」に比定できる岩戸山古墳に設置されていたものであり、ツクシ側の軍用馬を表現した造形物と判断してよい。同一部位の重なりと馬甲表現（線刻・粘土貼り付け）の差異を根拠とすると現状の出土品には2個体が存在するのは確実である。このような重装備の軍用馬が一般的だったとは考え難いが、磐井やその側近等騎乗の軍用馬が馬甲を身に着けていたことを示す有力論拠となろう。また、軍用馬として馬甲着装馬を運用（騎乗）するには、平時における軍用馬育成の調教技術が必須である。馬甲着装馬形埴輪の資料的価値は、馬甲という外来系物資の存在だけでなく、軍用馬育成技術を保持した調教師の存在にも及んでいる。

おわりに

物部氏・大伴氏と筑紫君の戦いが繰り広げられた南北路・「筑紫縦貫道」は、乱後においては宮・ミヤケへの貢納路、朝鮮半島への外征軍動員路として機能した。倭政権は国造･部民･ミヤケを駆使することで、筑紫君・火君をはじめとした筑紫洲の諸豪族が形づくってきた交通路等の生活基盤を、実質的に統治機構に組み込んだと評価できる。倭政権が筑紫洲内部の交通路として最重要視したのが「筑紫縦貫道」であり、百済救援戦争以後の国境域防衛において、北から水城・大野城、基肄城・関屋土塁、高良山城・上津土塁、女山古代山城、鞠智城と『日本書紀』に名を連ねるほどの重要な土塁・山城を配置して、幾重もの閉塞体制を構築しているのは偶然ではない。

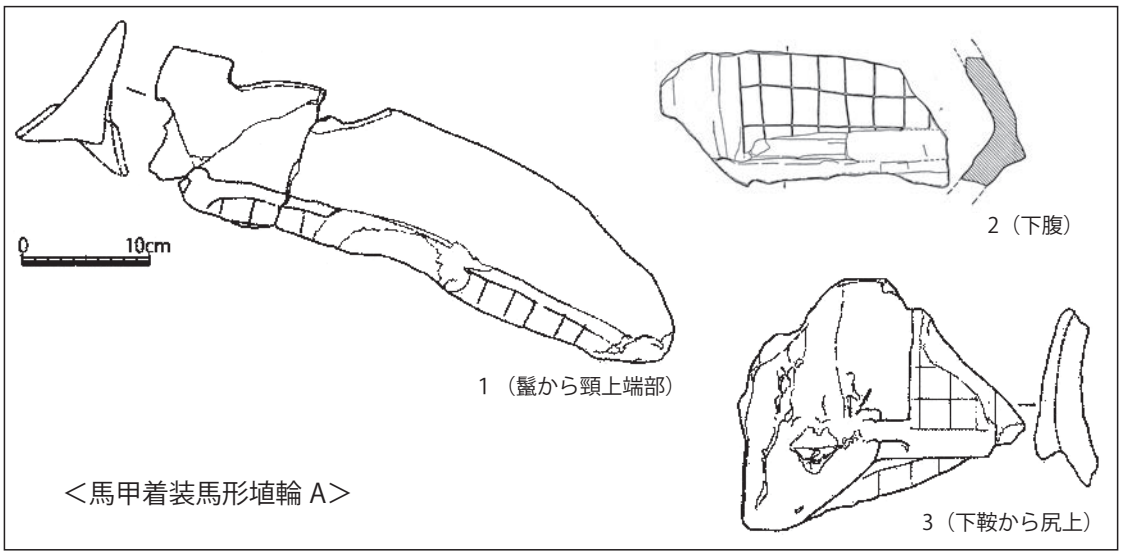
以上を総括すると、「ミヤケをつなぐ道」は倭政権による一元的整備ではなく、後に国造等に任命された諸豪族の多元的整備により形成されてきたものと結論できる。そして、その恩恵を最も享受したのが、「日本国」をつくり上げた倭政権であったと評価できる。

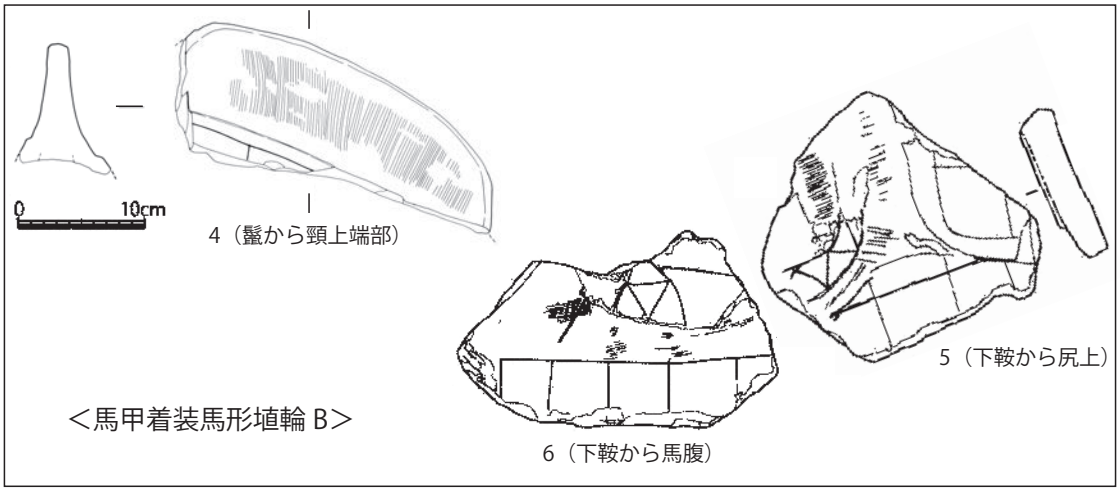
参考文献

栗田一生 2024「考古学からみた東国（関東地方）の官衙遺跡」『歴史評論』895 歴史科学協議会

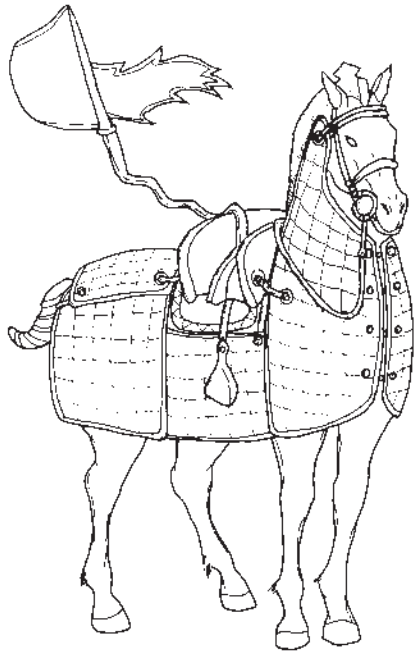
太田智2020「九州の須恵器甕からみた地域性と地域間交流」『福岡大学考古学論集3』武末純一先生退職記念事業会

亀田修一 2008「吉備と大和」『古墳時代の実像』吉川弘文館

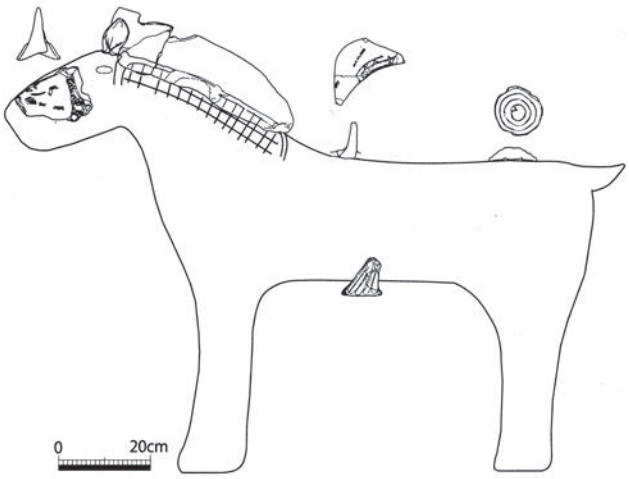




※1・3・5・6 は渡邉 2024 引用、一部改変。
2 は八女市 1972 引用、4 は筆者実測。
※1 ～ 3、5・6 は岩戸山古墳出土品。
4 は伝八女古墳群出土品（岩戸山古墳出土品の可能性あり）



【筆者提示の馬装復元案（小嶋・酒井編 2024）】



【渡邉響氏提示の馬装復元案（渡邉 2024）】

図 6　岩戸山古墳・伝八女古墳群出土馬甲着装馬形埴輪片の分類と馬装復元案

久住猛雄 2023「6世紀中頃～ 7世紀代の比恵・那珂遺跡群」『集落と古墳の動態Ⅴ』第24回九州前方後円墳研究会

小嶋篤2010「鉄滓出土古墳の研究」『還暦、還暦？、還暦！』武末純一 先生還暦記念事業会

小嶋篤2018「嘉穂型埴輪の研究」『埴輪論叢』第8号 埴輪検討会

小嶋篤2019「肥後南部型埴輪の研究」『埴輪論叢』第9号 埴輪検討会

小嶋篤2021a「火国の領域設定と鞠智城」『鞠智城と古代社会』第9号 熊本県教育委員会

小嶋篤2021b「瀬戸内海西端における横穴式石室墳の様相」『古文化談叢』第87集 九州古文化研究会

小嶋篤2022a「宗像型横穴式石室墳の研究」『九州歴史資料館研究論集』47 九州歴史資料館

小嶋篤 2022b「遠賀川流域の古墳と集落－造墓秩序と生活圏－」『集落と古墳Ⅲ』九州前方後円墳研究会

小嶋篤2024「筑紫君と「鞍轡尽しの坂」」『九州歴史資料館研究論集』49 九州歴史資料館

小嶋篤・酒井芳司編2024『特別展 筑紫君一族史』九州歴史資料館

酒井芳司 2024『大宰府の成立と古代豪族』同生社

重藤輝行2020「古墳時代九州北部の排水溝付竪穴住居と渡来人」『福岡大学考古学論集3』武末純一先生退職記念事業会

田代健二2008「横穴墓に関するいくつかの覚書」『田川市石炭・歴史博物館館報』第1号 田川市石炭・歴史博物館

田村悟2009「遠賀川流域の横穴式石室」『地域の考古学』佐田茂先生退任記念論文集

高木恭二 2012「菊池川流域の古墳」『マロ塚古墳出土品を中心とした古墳時代中期武器武具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第173集 国立歴史民俗博物館

仁藤敦史2012『古代王権と支配構造』吉川弘文館

福本寛2007「遠賀川流域の模倣坏について」『西健一郎先生退官記念論集』西健一郎先生退官記念事業実行委員会

宮田浩之2020「筑紫平野北部の古墳と馬飼い」『遺跡研究学の新地平－吉留秀敏氏追悼論文集－』吉留秀敏氏追悼論文集刊行会

桃﨑祐輔2012「牧の考古学－古墳時代牧と牛馬飼育集団の集落・墓－」『日韓集落の研究－弥生・古墳時代および無文土器～三国時代』日韓集落研究会

森貞次郎 1977「磐井の反乱－古墳文化からみた磐井の反乱」『古代の地方史１ 西海編』朝倉書店

八木健一郎2020「胴張り型石室と有蓋式装飾壺について」『遺跡学研究の地平』吉留秀敏氏追悼論文集刊行会

八女市教育委員会 1972『岩戸山古墳－環境整備に伴う基礎的調査の報告』

柳沢一男2004『描かれた黄泉の世界 王塚古墳』シリーズ遺跡を学ぶ010 新泉社

渡邉響 2024「岩戸山古墳出土馬形埴輪について」『九州考古学』第99号 九州考古学会

九州国立博物館公式ホームページから、これまでの大宰府学研究事業シンポジウムの当日資料集や研究論集を無料で閲覧・ダウンロードできます。「大宰府」をより深く考えるための資料として、ぜひご活用ください。

九州国立博物館 HP 大宰府学研究ページ

九州国立博物館「大宰府学研究」事業シンポジウム

海を渡った人馬と国の行く末

―筑紫君葛子献上の糟屋屯倉と国家形成―

編集・発行　九州国立博物館、福岡県
発　行　日　令和７年（2025）3月 26 日
印　　刷　正光印刷株式会社

20th ANNIVERSARY
KYUSHU NATIONAL MUSEUM

20 年分の感謝をすべての人に、
次の一歩もあなたと共に

九州国立博物館は 2025 年 10 月に開館 20 年を迎えます

KYUSHU NATIONAL MUSEUM
九州国立博物館